特221
218

新選近代文學

おらが春

小林一茶

文學博士 藤村 作註解

始

特221
218

帝國圖書館藏

文學博士 藤村作註解

らが春

栗田書店版

昭和一〇・二・二 帝國圖書館

序

近世文學は、これを國民的教養の上からいつても、人間教養の上からいつても、特に國文學鑑賞の上からいつて、これを現代に薦むべきものは少くない。偶〻その時代の無氣力な享樂的生活を反映してゐる作品の多いところに教養上忌むべきものがないといはれぬのを遺憾とする。今こゝにかゝる弊を有しないとおもふものを集めて本叢書を作つた。

古典文學は註釋に依らなければ、一般國民には讀解は出來ないから、古來その註解書、評釋書の類は多く、屋上屋を架するにも至つたが、近世文學は、現代人には通讀して一通りの意を了解し得るから、殆どその註釋書はない。今日までのところ極めて稀である。併し試みに、自分一人で讀み、又その講筵に列した人に就いて聽いて見るがよい、講筵に聽いて始めて近世文學の眞意を知り、又その中の多くの知識を得、その興味を十分に知つたといふ人は、蓋し少くないであらう。本叢書はこのことに鑑みて、

一般讀書の爲に適當と信ずる註釋を施した。而してその程度は、學究的煩瑣に陷らざるやう、さうして折角ありはありながら一向物足らないといふ不備を避けて、一讀その意を了得し得るに差支なきを期した。簡單にいへば大學、專門學校學生の自習程度にした積りである。

今や國民自覺の時代は來た。到るところに、皇國精神、日本精神の聲を聞く。しかし、何が皇國精神、日本精神であるかを知るには、眞に知るには、國史と國文學と、體驗とから、理解會得する外はない。國文學は決して獨り國文學者の國文學であつてはならない。本叢書の任はそこにある。著者の目的はそこにある。

藤村　作

解說

おらが春　全一冊

本書題簽には「おらが春」とあり、見返しには「我春集」とある。文政二年の正月一日の文と句の「目出度さもちう位也おらが春」に始まり、同年十二月廿九日の暮の文と句「ともかくもあなた任せのとしの暮」に終つてゐる。卽ち文政二年の文と句を日次順に集めたものと知られる。逸淵が編して、嘉永五年に出版したものである。見返しの書名の肩に「俳諧寺一茶翁著幷圖」とあるが、この圖は、故山口剛君の研究に在る通り、古い西鶴本等から人物等を集めて作つたもので、拙であるが却て面白い。

さて一茶は、信州柏原の小林彌五兵衞の長子として生れ、夙に母に別れて繼母に育てられたが、この繼母に弟が生れてから、間もなく、十四歲の時江戸に遣られた。江戸で葛飾派の二六庵竹阿に俳諧を學んだ。諸處を漂遊してゐたが、享和年間父が死んでから、豫て仲の面白くなかつた繼母及び異母弟との間、彌ゝ不和になつた。

文化九年頃からは主に故郷に暮した。五十歳を越えて始めて妻帯したが、その妻が死んだので、後妻を娶つた。二人の妻との間に出來た子は多く夭死し、最後の一女のみ成長した。晩年は家が火災に罹つて、土蔵のみ殘つたので、この土蔵に手入れして、その内に住んでゐた。文政十年十一月十九日六十五歳で歿した。

かく彼の生涯は幸福ではなかつた。母を夙く亡くしたこと、繼母及び異母弟に虐められたこと、子に夭死せられたこと等、その一事ですら、實に人の心を痛ましむるに足るが、かく重ね〳〵の不幸では、彼の性格にも影響する所が少くなかつたであらう。世にすねた、ひがんだ心の句に見えるのもそれであらう。子に對する頗る深い愛の見ゆるのもそれであらう。小さな生き物に對する廣い同情の表れてゐるのもそれであらう。「おらが春」一卷は彼の文や句の傑作を集めたものではないが、生熟した彼の面目を窺ふべきものであることは疑のないものである。

世々の變風、元祿に至りて正雅やゝ定まりしよりこのかた、諸家の風調、おの〳〵その得失によりて、風姿極りなしといへども、かの向上の一路は踏たがふ事なく、ひばりのくちさかしく、蚯蚓の鈍くお(を)かしげなる、又は蓬の直よかに、蘇のくねれるも、みな自然の風骨を具して、しかも正雅にもとらざるは、天の妙といふべし。其一妙を得たるしなぬの一茶、一期の風雅、言行ともに洒落にして、焰王も腮をとき、獄卒も臍をかゝゆべし。しかはあれど毛頭れいの向上の本意を失はず、實に近世獨歩の俳道人とせむ歟。こたび同國の一之、家に傳へし坊が遺稿を、その儘上木して、追慕のこゝろざしを盡す。予も亦舊知己をわすれず、

世々の變風――貞門、談林等芭蕉以前の諸俳風をさす。
元祿に至りて云々――元祿に芭蕉が出て蕉風を開いてから、俳諧は漸く滑稽諧謔の域を脱して、風雅を基調とする眞正の藝術となつた事をいふ。
向上の一路――佛語。禪家で一宗の祕奥、悟道の究竟をさしていふ。こゝでは芭蕉俳諧の極致、即ち風雅の誠。
しなぬ――俳諧。古への稱である。
直よか――スグよか。まつすぐ。
風雅――もと詩の國風と大小雅との稱。轉じて廣く詩歌の道の意に用ゐられる。こゝでは俳諧。
焰王――閻魔王。
腮をとき――口を開いて大笑すること。漢書、匡衡傳「衡說詩解人頤。」
獄卒――佛說に、地獄で罪人を苛責する鬼。
臍をかゝゆ――臍を燃るともいふ。甚だしく笑ふこと。
俳道人――俳諧の道に所遊した人。
一之――白井氏。通稱は彦兵衛。有明庵と號し、信州下高井郡野の伸町筋で酒造業を營んでゐた。家號を井賀屋といふ。明治十七年九月十四日歿、六十四歳。
坊――一茶。晩年剃髮して一茶坊と號せしよりいふ。
そのまゝ上木して――眞蹟通りに版にして。

坊が命終の年、柏原の舊里を訪ひて往事をかたるに、あるひは泣、あるひはわらひてわかれぬ。其俤まぼろしに見へ(え)て、扨こそこの集の序者にたてるも、これ又因縁によれるべらし。

嘉永壬子春涅槃日

東都　瓢隱居逸淵

坊が命終の年――一茶死去の年、即ち文政十年。

柏原――一茶の故郷信州上水内郡柏原。

べらし――「ならし」「けらし」などの聯想によつて誤用したもので「べかるらし」の意であらうか。或は又土佐日記などに見えてゐる「べら」を用ひたものか。

嘉永壬子春涅槃日――嘉永五年二月十五日。

逸淵――見玉氏。碩布の門人。可布庵、似我老人、瓢隱居等の別號がある。武藏八幡山の人。初め上州高崎に住し、後江戸に移つたが、晩年武州本庄驛に退隱した。文久元年歿、七十二歳。「逸淵發句集」がある。

昔たんごの國普甲寺といふ所に、深く淨土をねがふ上人ありけり。とじの始は世間祝ひどしてざゞめけば、我もせん迚、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〳〵せよと、きといひをしへて、本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅ミ〳〵は小闇キに、初鳥の聲とおなじく、がばと起て、敎へのごく表門ッを丁〳〵と敲けば、內より、いづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧に候と答ふるよりはやく、上人裸足にてお(を)どり出で、門の扉を左右へさつと開て、小法師を上坐(座)に稱(請)じて、きのふの手紙をとりて、うや〳〵しくいただきて、讀ていはく、其世界は衆苦充滿に候間、はやく

昔たんごの國云々――この話は沙石集卷九第七「迎講の事」の條に見える。

きと――きつと。確かに。

初鳥――元日の朝早く鳴き渡る鳥。

請じて――請待して。迎き入れて座をすゝめる。

其世界――人間の住む世界を指す。即ち三惡煩惱、風雨炎暑等の苦の充滿してゐる現實の世界。

吾國に來たるべし、聖衆出むかひしてまち入候と、よみ終りて、おゝ〳〵と泣れけるとかや。此上人みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきつゝ、初春の淨衣を絞りて、したゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人に對して無常を演ルを禮とすると聞からに、佛門においてはいはひの骨張(頂)なるべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも尼(厄)拂ひの口上めきて、そら〴〵しく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家は、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲り形りに、としの春もあなた任せになんむかへける。

聖衆——シヤウジユと訓む。極樂淨土に在す諸々の菩薩。こゝでは特に念佛行者の終命の時來迎するといふ二十五菩薩のこと。平家物語卷一「聖衆の來迎にて御座せば、などか引攝なかるべき。」

厄拂ひ——昔、大晦日又は節分の夜家々を廻つて人々の求めに應じ、厄拂ひの口上を述べて災厄を祓ひ、錢などを乞うた一種の乞食。その口上は一定してゐないが、何れも鶴龜にたぐへて壽命長久を祈るなどの口出度い文句によつて讀られてゐた。男色大鑑卷八「やあら日出たや鶴は千年龜は萬年、東方朔は九千歳と、年越の夜の厄拂ひが高聲。」

屑屋——屑のやうなつまらぬ家。あばらや。

あなた任せ——經てゐる彌陀の御心に任せきること。他力本願の境地。

目出度さもちう位也おらが春　一茶

こぞの五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を居へ(据ゑ)て

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

とし男つとむべき僕といふもの もあらざれば

名代にわか水浴る烏かな　一茶

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月

山の月花盜人をてらし給ふ

おらが春

目出度さも——中位の目出度さに安住して、我が春を驚ぐとの意。そこには、未だ差別の世界を脱し得ぬながら、あるがまゝの境涯に自適する心の落着きが見える。一茶が五十餘年の苦闘の生活を經て漸くに到達し得た心境である。

こぞの五月生れたる娘——一茶の長女さと。文政元年五月四日出生。尙さと女のことは下文に詳しい。

這へ笑へ——子供僞な一茶が我が子に對する愛情の流露。

とし男——もと武家で、新年の諸儀式を勤めた男のこと。後には一般民間にもこの稱がある。主として元日の若水を汲み、座敷を清めなどし、又節分の豆撒をも行ふ。

名代——ミヤウダイと訓む。代理を務めること。烏の行水といふ諺をかりて、若水浴びて年男勤むる僕もなき貧者の境界をいつてゐる。

すつぽんも——「月とすつぽん」といふ俚諺や「蟲鳴く」といふ季題の聯想より、圖かな春月の朧に照り渡る水江の美景に對して、描き出された雅かな想像。

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花かな

さくら〳〵と唄はれし老木哉

櫻へと見へ(え)てじん〳〵端折哉

〔(頭書)ツボサウゾクハ、ウハギハ上衣ノツマヲハサミタル姿也。今云カイドリハシヲリノサマ也。玉カヅラニ、ツボヲリ姿ト云々。〕

初午

灰猫のやうな柳――猫柳の花に埃がかゝつて汚れたのをいふか。それすら佛の前にあればお花と見えるとの意。

さくら〳〵と――頓道成寺「櫻々とうたはれて」による着想か。

じん〳〵端折――「鑑端折」又は「神事ばしより」の音便といふ。衣の背縫の裾より七八寸上を摘み、これを帶の結目の下に折込むこと。櫻へと見えては、櫻狩に行くと見えての意。

初午――陰曆二月の初めの午の日。この日初午祭と云つて、山城國伏見の稻荷神社を始め、全國大小の稻荷、市人の家に祀つてある稻荷の大祭を行ふ。

花の世を――初午祭には正一位稻荷明神(神體を狐とする俗信がある)は人出多く賑はふのに、この花の春を同じ狐でも、人に顧られぬ野狐は淋しく鳴いてゐるよ。

二日灸――陰曆二月二日に灸を据ゑること。效果平常に倍すると云つて廣く行はれる。八月二日にも亦この事があるが、こゝは二月の二日灸を云ふ。醫家に唯獨り住む身には、二日灸を共にするものもなければ、猫にも据ゑてやるといふ孤獨者の心境。

葎から――いぶせき葎の中から、あの美しい胡蝶がよくも生れ出たといふ驚異の心持。但しこれを人事に移せば鄙に

花の世を無官の狐鳴にけり

かくれ家や猫にもすへ(ゑ)る二日灸

葎からあんな胡蝶の生れけり

上野遠望

白壁の誹れながらかすみけり

苗代は巷のかざりに青みけり

花の陰あかの他人はなかりけり

二月十五日

小うるさい花が咲迚寢釋迦かな

み佛や寢ておはしても花と錢

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる

おらが春

もよくこのやうな美しい頌があるよといふ驚歎にもなる。因みに信州上水内郡長沼村山口義衛氏所藏の一茶萬蹟には、賣られ行く頌の繪にとの句(但し座五「出たりけり」)が讃してある。

上野遠望――上野の山から江戸の町を眺めやつての意か。

白壁――富裕な町人の家か。富人にはよく、世間から因業者、吝嗇漢などの誹りを受けてゐる者がある。その家が靄の中の一景となつて詩を成してゐる趣きである。

苗代は――何の風情もない草の屋に、傍の苗代田が青み渡つて、飾となつてゐるとの意。

花の陰――爛漫たる櫻花のもと、同じ春の喜びに醉ふ人々のうちとけたさま。又こゝろ。

二月十五日――釋尊が沙羅双樹の下で涅槃に入つた日。この日全國各寺院に於ては涅槃會と稱し、涅槃像をかかげ遺教經を誦して法會を營む。

寢釋迦――釋迦入涅槃の像。句は、人生の煩を厭うて涅槃に入つた釋迦の心を花によつて詠んだもの。

み佛や――涅槃の釋迦佛。句は寢てゐられる涅槃の釋迦佛に散錢と散る花とが集まることを詠じてある。

秤にかゝり――生れて日數のたゝぬ猫の子を秤つて見るのである。句は猫の子の可憐な無邪氣なさま。

玉川

さらし布霞の足しに聳へ(え)けり

妙専寺のあこ法師たか丸迚、とし十一に成りけるが、三月七日の天うら〳〵とかすめるにめでゝ、くは(わ)んりうといふふとくたくましき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまかりて、芹、薺などつみて遊ぶ折から、飯綱おろしの雪解水、黒けぶり立て、動〳〵と鳴りわたりておし來たりしに、いかゞしたりけん、橋をふみはづしてだぶりと落たり。やあれ觀了、たのむ〳〵と呼はりて、爰に頭いづると見れば、かしこに手を出しつゝ、たちまち其聲も蚊のなくやうに遠ざかると見るを、此世の名殘として、いたましいかな、逆卷く波にまき込まれて、かげも容も見へ(え)ざりけり。あはやと村の人〳〵打群りて、炬をかゝげて、あちこち搜しけるに、一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるを、とり上て、さま〴〵介抱しけるに、むなしき袂より蕗の薹三つ四つこぼれ出たるを見る(見るにカ)つけても、いつものどくいそ〳〵歸りて、家内へのみやげのれうにとりしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆〳〵袖をぞ絞りける。とみに駕にのせて、初夜過るころ寺にかき入れぬ。ちゝ母は今やおそしとかけ寄りて、一目見るより、よゝ〳〵と、人目も耻ず大聲に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も、

玉川——武藏の玉川。六玉川の一。往昔この川で調布を作り、内藏寮に納めたので、調布の玉川ともいふ。萬葉集卷十四武藏國歌「玉川にさらす手づくりさら〳〵に、なにぞこのこのこゝだかなしき。」

さらし布——春霞の白く棚引いてゐる上に、更にその上に續ぎ足したかの如く晒し布が高く張り渡されてゐる光景。

妙專寺——信州上水内郡柏原村小丸山の麓にある淨土眞宗大谷派に屬する寺。一茶の菩提寺であつた。

あこ——童。

とし——今年。

荒井坂——上水内郡高岡村新井の近くにあつて、柏原からは約二里程隔たつてゐる。

飯綱おろし——飯綱はイヒヅナと訓む。戸隱山の東に並んで、柏原の西南に聳える山。標高六千三百尺餘。その山より流れ下る意。

動〳〵と鳴りわたりて——どう〳〵と音立てて。

炬——タイマツ。

むなしき袂——むなしき人の袂。

初夜——戌の刻。午後八時頃。

人に無常をすゝむる境界——僧侶の身分。

其身に成りては、さすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけぬ(ぬるカ)はとは(わ)り也けり。旦には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍と成りてもどる。目もあてらぬ(られぬカ)ありさまにぞありける。しかるに九日野送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下萌いそぐわか草を

野邊のけぶりになして見んとは　一茶

長〳〵の月日、雪の下にしのびたる蕗、蒲公(英脆カ)のたぐひ、やをら春吹風の時を得て、雪間〳〵をうれしげに首さしのべて、此世の明り見るやいなや、ぽつりとつみ切らるゝ草の身になりなば、鷹丸法師の親のどくかなしまざらめや。草木國土悉皆成佛とかや。かれらも佛生(性)得たるものになん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙哉　一茶

梅の花爰を盗めとさす月か　〃

松嶋の小隅は暮て鳴く雲雀　〃

大猫の尻尾でなぶる小蝶哉　〃

三月十七日ほしな詣

花ちるやとある木陰も小開帳　〃

通りぬけせよと垣から柳かな　〃

其身に成りては――其の身に無常が廻り来ればの意。

野送――葬送。

思ひきや――下萌えは冬うら枯れた草が早春より地上に青々と萌え出すのたいふ。野邊の煙は火葬の煙のこと。歌は下萌いそぐ若草に發育ざかりの童の意を含ませ、鷹丸が、幼くしてこの世を去つたことを悲しんだものである。

草木國土悉皆成佛――草木や國土等の無情物も皆佛性を有して、悉く成佛するとの意。華嚴、天台、眞言等の一乘教に見える思想である。中陰經の一頌四句の偈文に「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」

佛性――佛となるべき本性。

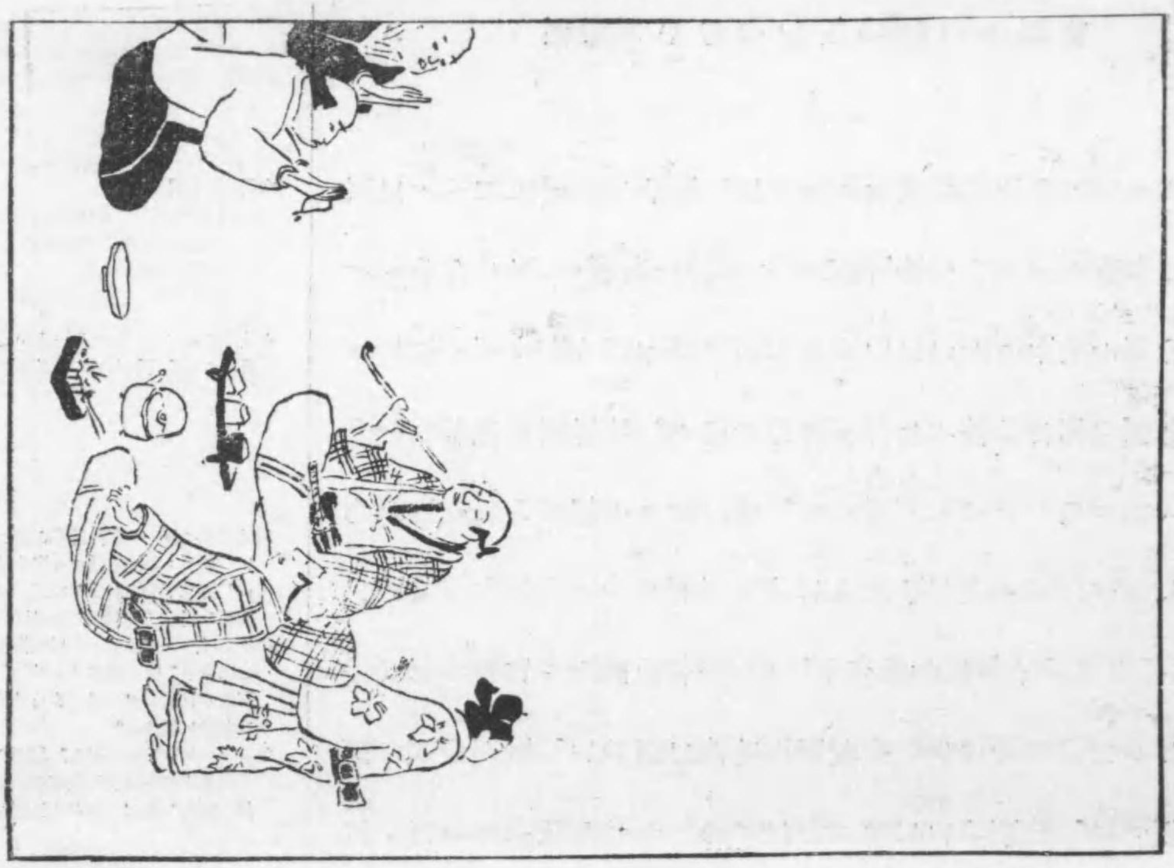
おれとして――自分と一緒に。信濃地方の言葉である。八番日記にも「おれとして須臾一見か笠の繩」とある。

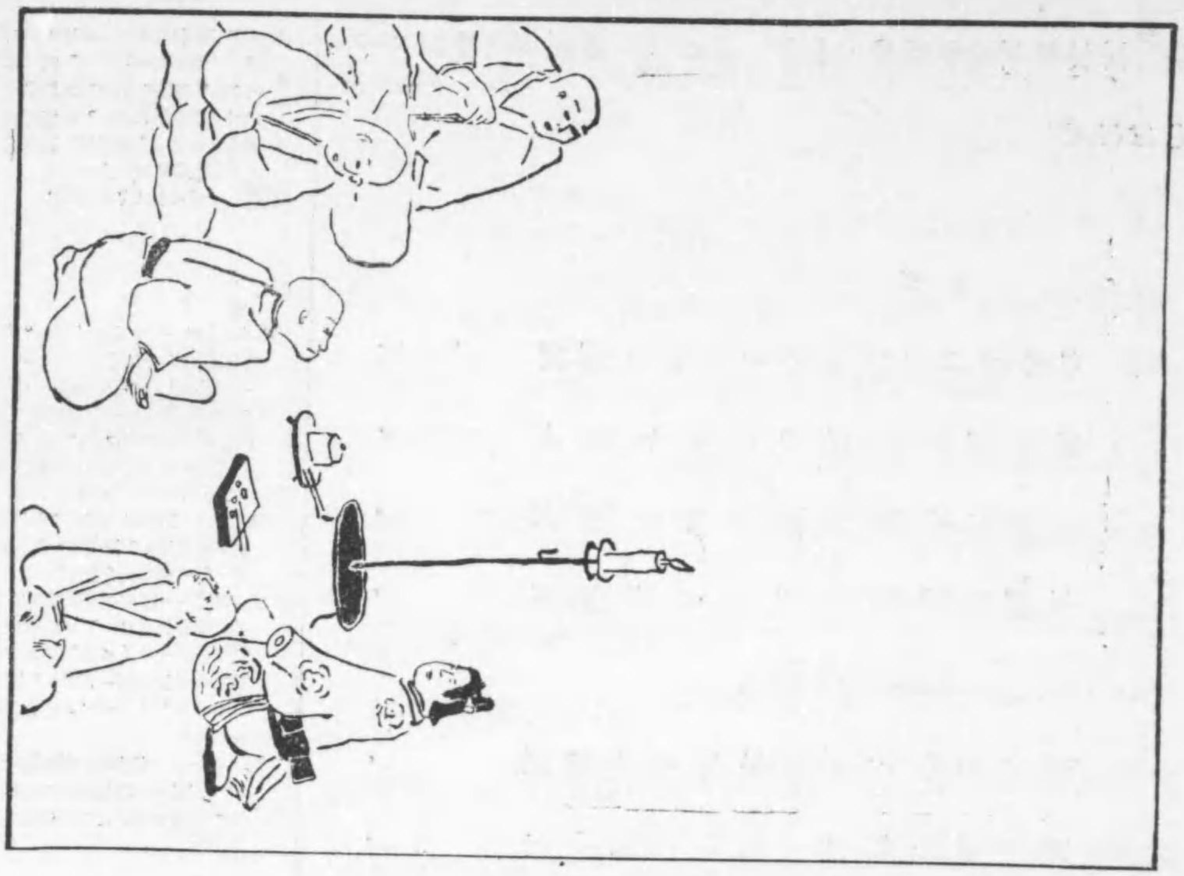
梅の花爰を盗めと――月光なくば何處に梅の花があるとも知られまいに、月の光がさす爲に爰を盗めと言はぬばかりにいとあらはである。

松島の――廣漠たる松島の片隅には青闇が次第に迫り、暮れ行く空に雲雀の高鳴く、うら淋しい光景。

ほしな詣――信州上水内郡保科村の清水寺に參詣すること。この寺は坂上田村麿の建立と傳へられ、社殿の造りた京都の清水寺に擬してある。折しも開帳があつて、一茶もこゝに參詣したのであらう。

花ちるや――保科詣の途すがらの嘱目で、花散る木蔭に觀音の素像でも掛けて、散銭を得てゐる乞食僧のことであらう。





餅腹をこなしがてらのつぎ穂哉　〃

正月元日の夜の丑刻より始りて、打つゞき八日目〳〵に天に音樂あるといふ事、誰いふともなく云觸らして、いつ〳〵の夜そんぜうそこにてしかときゝしと(いふ脫カ)人も有。又吹風の迹なし事とけなすものもあり。其噂東西南北にばつと弘りぬ。つら〳〵思ふに、全く有りと信じがたく、又ひたすらなしとかたづけがたし。天地ふしぎのなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙(處)女の天下りて舞しためしなきにしもあらず。今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優してたのしむならめ。それを聞得ざるは、其身の罪の程によるべし。何にまれあしからぬとりざたなり

丑刻——午前二時頃。

そんぜうそこ——尊文足下から出た語であらうといふ。そこらあたり。

甘露を降らせ——天下泰平の瑞祥として、天より甘露が降ると言ひ傳へてゐる。漢書「元康元年、甘露降二未央宮一、大赦、以二甘露連降一、改レ年爲二甘露一」乙女の天下りて云々——天武帝が吉野山に行幸し、琴を彈ぜられた時、天女が天降つて舞をまつたといふ傳說（本朝月令等）がある。

俳優——ワザヲギと訓む。神慮の慰をなして神を招く意か。滑稽な所作をして歌ひ舞ひ、神人の意を和げ樂ませること。

と、三月十九日夕過より、誰かれ我菴につどひつゝ、おの〳〵息をこらして、今や〳〵と待うち、夜はしら〳〵明て、窓の梅の木に一聲有。

今の世も鳥はほけ經鳴にけり　一茶

鶯の馳走に掃しかきねぞ　〃

馬迄もはたご泊や春の雨　〃

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　〃

かすむ日やしんかんとして大坐(座)敷　〃

横乘の馬のつゞくや夕雲雀　〃

京島原

おらが春

一聲——鶯の一聲。

馬迄も——馬は屢々の武士の乘馬であらう。それが主人と共に、立派な旅籠で泊ろといふのである。音もなく降りしきる細雨を配して春の夕暮のゆったりとした趣を見せてゐる。

雀の子——狂言對馬祭「馬場退け〳〵、御馬が參る〳〵」などを思ひよせたものか。

かすむ日や——春靄の搖曳する中に、寂然と靜まりかへる古めかしい大座敷のさま。甘い潤ひを含んだ寂しい靜けさ。

横乘の——雀雲の揚る夕暮の空の下を、一日の仕事を終へた馬子達の氣樂さうな横乘姿が續く、長閑な街道風景。

入口のあいそになびく柳かな　〃

藪村やまぐれあたりも梅の花　一茶

正月や夜はよる迚うめの月　〃

茶屋むらの一夜にわきし櫻かな　〃

翌〳〵と待たるゝうちが櫻かな　白飛

なぐさみにわらを打也夏の月　一茶

卯月八日

長の日をかは(わ)く間もなし誕生佛　〃

五月雨も中休みかよ今日は　〃

病後

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　〃

入口の――京都島原遊廓の大門口にある「いとまの梅」を詠んだもの。「あいそになびく」といふ所には梅の人を歓び迎へる心ありげな姿態と共に、遊女のなまめかしい姿を聯想させる。

藪村や――藪の多い村里に、美しく梅の咲いてゐる家を、もしやと訪ねて見たら偶然にも自分の目指してゐた家であつたとの意。

正月や――書はいろ〳〵の面白い遊び、夜は梅花にさす月の美しさ。正月の晝夜の樂しいさま。

茶屋むらの――櫻が咲くと時の間に其の邊に多くの掛茶屋の出來たさま。

白飛――一茶の門人。柏原の隣村古間の人。一茶と親しく往來した事は一茶の日記に散見する。

なぐさみに――「まゝつ子や涼み仕事に蓋たゝく。」それも今は遠き日の思出に過ぎない。夏月の光を浴びてなぐさみがてらの蓋たゝき。そこに農村に住むものの老境の安昌さがある。

卯月八日――釋尊誕生の日に當る。この日全國諸寺院に於ては佛生會を修する。種々の花を飾つて花御堂を作り、その中に小さい誕生佛像を安置し、これに香湯、甘茶の類を灌ぎかける。これを灌佛又は浴佛といふ。

ちりの身も――病氣あがりで身體はふら〳〵してゐる。その身體ははかなき蹈

五月雨も仕廻(舞)のはら〳〵かな　〃

小坐(座)頭の天窓にかぶる扇かな　〃

竹の子と品よく遊べ雀の子　〃

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ　〃

谷藤橋

這わたる橋の下よりほとゝぎす　〃

はつ瓜を引とらまへて寢た子哉　〃

人形町

人形に茶をはこばせて門涼み　〃

今迄は罰もあたらず晝寢蚊屋　〃

蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　〃

埃にも比すべきものである。それを紙帳の風に搖れてふは〳〵してゐるさまに結びつけて、詠んだもの。紙帳は紙で作つた蚊帳。貧しい人々が多く用ひた。

小座頭の――小座頭が剃つた頭の熱さを避ける爲に、扇を頭上にかざして日除とした樣の滑稽を詠んだものである。

竹の子と――竹に雀の取合せは通常のことであるが、こゝは優しい竹の子と可憐な雀の子の取合せ。竹に雀は品よくとまる」などの俗諺からの思ひつき。

二軒並んで――一茶の宗と弟專六の宗と、この兩宗は和解後宗の棟を閧つて住んでゐた。その和睦のさまを詠んだものか。

人形町――今、東京市日本橋區小傳馬町から横に箱崎町及び中洲に至るまでの街路。當時は宗毎に人形細工人が居つて、その製作に從つてゐたといふ。

人形――羅人形。

今迄は――蚊帳まで吊つて晝寢する樂しさ。かゝることとして今迄はよくも天罰を蒙らなかつたこと。

蚊がちらり――冬の長い北信濃に、漸く夏が訪れて、蚊がちらほら見え初めると、始めて年寄の天下の如く感ずるといふ、寒さを厭ふ老人の心境。

世がよくばも一つ泊(留)れ飯の蠅 〃

卯の花に一人きりの社かな 〃

岡栖

蟲に迄尺とられけり此はしら 〃

身一つすぐす迚、山家のやもめの哀さは

おの(が脱カ)里仕廻(舞)てどこへ田植笠 一茶

あつばれの大わか竹ぞ見ぬうちに 〃

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ 〃

としよりと見るや鳴蚊の耳のそば 〃

戸隠山

世がよくば——豐年だつたら、何を惜まう、も一つもとまれ。

卯の花に——卯の花の眞白に咲く社頭に、佇む人も唯一人といふ靜かな風情。

岡栖——豐前などの閑靜な住居。こゝでは一茶の庵。

虫に迄——尺蠖の柱に絡ふ事から、幽棲の靜かな生活を述べたもの。

おのが里——あちこちの家に雇はれて田植に働く獨身者の上を詠んだ句。己が居村の田植が濟んで、これから何處の村の田植をするのであらう。

花つむや——夏花を摘まうとして、手に携へてゐた扇をちよつと後頭の襟にさしたといふ夏の一情景。ぼんのくぼは頭の後の窪んだ所。

としよりと——おれを耳の遠い老人と見るか、蚊が耳の側近く寄つて來て鳴く。

戸隠山——柏原の西方、飯綱、黒姫二山の奥に聳える山。標高六千三百尺餘。

居風呂へ——山から湧き出る清冽な水を寫でとつて、そのまゝ据風呂に流し込んでゐる山家のさま。戸隠中社附近の村落風景。

居(据)風呂へ流し込だる清水かな 〃

此入りはどなたの菴ぞ苔清水 〃

一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな 〃

其門に天窓用心ころもがえ(〃) 〃

かくれ家の柱で麥を打れけり 〃

越後女旅かけて商ひする哀さを

麥秋や子を負ながらいはし賣 〃

筍よ人の子なくば花咲ん 〃

芝でした休み所や夏木立 〃

山苔も花さく世話はもちにけり 〃

子子の天上したり三ケ(日)の月 〃

居(据)風呂——「入り」は入りこんだ所。奥。苔の細道が長く續くあたり清水湧く物寂びた光景に、その奥に庵を結んでゐる人を床しく思ひやつたのである。

一つ蚊の——同一の蚊が、だまつて來ては、我が身をあちこちとしくしくさす意。

其門に——初夏、初袷の身も心も輕く訪れる人に、わが草の屋の低い戸口に用心せよといふのであらう。

かくれ家の——わが草の屋の軒下で、庇の柱で麥打ちをした人があつたといふのである。麥を打つとは麥の穂を臼などに打ちつけて實を取ることをいふのであらう。

麥秋——初夏、麥の收穫期。

筍よ——筍は子供のよく腿絎するものである。それで若し子供が居なかつたら、滿足に成長して、その上に花も咲くだらうといつたのである。

芝でした——烈日を避けて木立の蔭の涼しい芝生に一寸した茶屋を出してゐる街道風景。したは作つたの意。普通茶屋は、緣臺などを置くものであるが、これは芝生をそのまゝの休み所とした粗末なものであらう。

世話——こゝは殺目の意。

子子の——西の空に小さく見ゆる三日月の仄かな光を放つ時、溜水から小さな子子が羽化して空に飛び行くを言つたのである。

獨樂坊

寢所見る程は卯花明りかな

法の山や蛇もうき世を捨衣

としみちのくの方修行せんと、乞食袋首(に脱カ)かけて、小風呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行らしく見へ(え)て殊勝なるに、心は雪と墨染の袖〔(頭書)似雲法師、西行に麥ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖〕と、思へば〳〵入梅晴のそらはづかしきに、今更すがた替へるもむづかしく、卯花月十六日といふ日、久しく寢馴れたる菴をうしろになして、二三里も歩みしころ、細杖をつく〳〵思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて歸らんとも白川の關をはる〳〵越る身なれば、

〔(頭書)天哉子ノ迹ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌ、ながらへて歸らんとも白川の關をはる〳〵越る身なれば　一茶〕十府の菅菰の十に一つもおぼつかなしと案じつゞくる程に、ほとんど心細くて、家〳〵の鷄の時を告ル聲も、とつてかへせとよぶやうに聞へ(え)、畠〳〵の麥に風のそよ吹くも、誰ぞまねくどく覺へ(え)て、行道もしきりにすゝまざれば、とある木陰に休らひて、痩脛さすりつゝ詠(眺)ムるに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名殘りお(を)しさに、

獨樂坊——七番日記に「獨樂庵をとふに不逢『蠅除の草を釣して又どこへ』」、文政版一茶巻句集に「獨樂坊をとふに逢のかゝりければ三界無安といふことを『蠅除の草を釣してきてどこへ』」とある。一茶の親しくしてゐた俳人でもあらうか。

卯花明り——卯の花は四月に雪の如く枝一杯に花を著ける。それで花明りがする。句は初夏のたそがれ、卯の花の白い花明りの爲に暮所も見える程である。

の蔭で、簡素な侘住居のさま。

法の山——法の山は比叡山、高野山などの如き名刹のある山。そこには多くの僧も居り、信心の徒も詣でる。かゝる信仰の靈山なれば蛇さへ人が俗衣を脱して法衣を著るが如く、脱殼を殘してゐると通世したのでもあるやうに感じたのである。

みちのくの方——奥州地方。

乞食袋——乞食が携へて、食物其他一切の雜物を入れる袋。

西行——俗名佐藤義清。初め鳥羽上皇に仕へて北面の武士であつたが、一朝無常を感じて遁世し、それより後は諸國を廻り、自然を友とし、吟詠に心をやつた。建久元年二月十六日歿。七十六歳。家集に「山家集」がある。

似雲法師——安藝廣島の人。或は播州姫路の人とも云はれる。本名如雲。藤原實藤について歌を學ぶ。後諸國を遍歴して居住を定めず、時の人に今西行と呼ばれた。

卯花月——陰暦四月の異稱。

久しく寢馴れたる庵——柏原の草庵。

細杖をつく〳〵——細杖をついてつくづく。

六十の坂云々——一茶この時五十七歳。

一期の月も云々——一期は一生涯。我が老の身の餘命いくばくもないのを、西山に沒しようとする月に譬へた。方丈記「そもく一期の月影傾きて餘算山のはに近し。」

天哉子——木下長嘯子。尙下文長嘯子の註を見よ。

白川の關——磐城國西白河郡古關村大字旅宿の邊にあつた關。奥羽に入る關門である。こゝは白川に知らずをかける。

十符の菅菰——十符はトフと訓む。編目の十筋ある菅の席。昔奥州の十符の里（仙臺の東北方一二里の所と傳へられる）から産したといふ。奥細道「おくの細道の山際に十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調て、國守に献ずと云り。」

ほとんど——非常に。

思ふまじ見まじとすれど我家(ガ)哉　一茶

おなじ心を

古郷に花もあらねどふむ足の　仝

あまびらをおどろかさじと青麥に

ほどよき風の吹(ギ)すぐるかな　仝

日ミ懈怠(ニシテ)不レ惜二寸陰一

〔(頭書)　朱文公勸學文　勿謂今日不レ學(シテモ)而有レ來日(ヲ)。勿謂今年不レ學而有レ來年。日月逝(ヌ)矣。歳不二我延一(ヲ)嗚呼老(ダリ)。是誰之愆(ガ アヤマチゾ)。〕

けふの日も棒ふり蟲よ翌も又　一茶

思ふまじ――「すれど」の下に「思はれ、見られる」と補つて解すればよい。

あまびら――信濃の方言、蝶々のことをいふ。

棒ふり虫――蚊の幼虫、子子。この語に「棒に振る」(無益にする意)をかけて、日々を無爲に過す己の境涯を詠つたもの。翌はアスと訓む。

無限欲有限命

此風に不足いふ也夏坐(座)敷〳〵

起〳〵の欲目引張る青田哉〳〵

心に思ふとを

古郷は蠅迄人をさしにけり〳〵

直き世や小銭程でも蓮の花〳〵

松陰や寢蓙一ッの夏坐(座)敷〳〵

題童唄

三度搔て蜻蛉とまるや夏座敷　希杖

片息に成て逃入る螢かな　一茶

夕貝の花で涕て(て衍カ)かむおばゝ哉　一茶

起〳〵の――朝起きると直ちに、稻の出來榮えよかれと、慾の目を見張つて青田を眺める農夫のさまである。

古郷は――繼母を始めとして、故郷の人々の冷酷な仕打に對する憤懣を螢に託して述べたもの。

直き世や――小錢程の小さい蓙をもつ蓮も、蓮である以上、美しい蓮花を開く。この正直さに直き世の姿を見出したのである。

松蔭や――松蔭に敷いた、たつた一枚の寢蓙を夏座敷と觀ずる侘人の境涯。

搔いて――夏座敷に飛込んで來た蜻蛉が、壁に留らうとして、空しく搔いて辷るのみ、それを三度繰返してやつと留まることを得た。

希杖――湯本氏。通稱五郎治。巢鶯舍と號した。信州下高井郡湯田中溫泉湯本の主。一茶の門人。天保六年歿、七十四歳。

片息――絶え〳〵な息。螢が弱々しく明滅するさまの形容。

あつい辻つらで手習した子哉〳〵

大螢ゆらり〳〵と通りけり〳〵

田中川原如意湯に晝浴みして

なを(ほ)暑し今來た山を寢て見れば〳〵

なむあみだ佛の方より鳴(ク)蚊哉〳〵

とべよ蚤同じ事なら蓮の上〳〵

かくれ家は蠅も小勢でくらしけり〳〵

ひいき鵜は又もから身で浮みけり〳〵

松の蟬どこ迄鳴(イ)て晝になる〳〵

今迄は罰もあたらず晝寢蚊屋〳〵

はなれ鵜が子のなく舟にもどりけり〳〵

面で手習――手習子供が、暑いので墨汁で汚れた手を以て汗を拭ひなどして顔を汚してゐるのを、顔で手習をしたといつてゐる。

田中川原如意湯――湯田中溫泉湯本にある。

なむあみだ――薄暗い佛壇の彌陀佛の像の方から蚊の聲の聞えるのか。六字の名號の掛軸の陰から聞えるのか。

とべよ蚤――朝起抜けに蓮池の傍で蚤を取りながらの吟であらうか。どうせ往生するなら蓮華の上がよいといふ意か。

ひいき鵜――自分の贔屓にしてゐる鵜。から身では空身で、卽ち魚を捕らずにの意。

今迄は――この句重出。

はなれ鵜――綱をはなれた鵜。逃げた鵜が、子の鵜の鳴く舟へもどつたのを詠んでゐる。

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたり迚、いひつぎきゝ傳へて、界隈はさら也、よそ國の人も足を勞して、わざ〳〵見に來るもの日〳〵おほかりき。おのれもけふ通がけに立より侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらひ、雨覆ひの蔀など今樣めかしてりゝしく、しろ、紅ゐ、紫、はなのさま透間もなく開き揃ひたり。其中に黑と黄なるは、いひしに違はず、目をおどろかす程めづらしく、妙なるが、心をしづめてふたゝび花のありさまを思ふに、ばさ〳〵として何となく見すぼらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りのたをやめの側に、むなしき屍を粧

魚淵――ナブチ。佐藤氏。名は信胤。字を松益といひ、草不庵、正風院、二水觀、正風堂、元善山人等の號がある。信州上水内郡長沼の人で醫を業とした。一茶の門人。天保五年六月歿。八十歳。筑紫高良山麓の桃青塞神を勸請し、芭蕉の句碑を建て「木槿集」「迹祭」を出版する等一茶門人中に於ては最も活動した人である。

蔀――上下に開くやうに作つた格子戸の一種。日除又は風、雨を防ぐに用ゐる。今樣めかしてりりしく――當世風に立派にして。

ばさ〳〵――艶なくひからびた樣。

たをやめ――手弱女。美人。

ひ立て並べおきたるやうにて、さら〳〵色つやなし。是主人のわざくれに、紙もて作りて葉がくれにくゝりつけて、人を化すにぞありける。されど腰かけ臺の價をむさぼるためにもあらで、ただ日〳〵の群集に酒茶つひやしてたのしむ主の心、おもひやられて、しきりにをかしくなん。

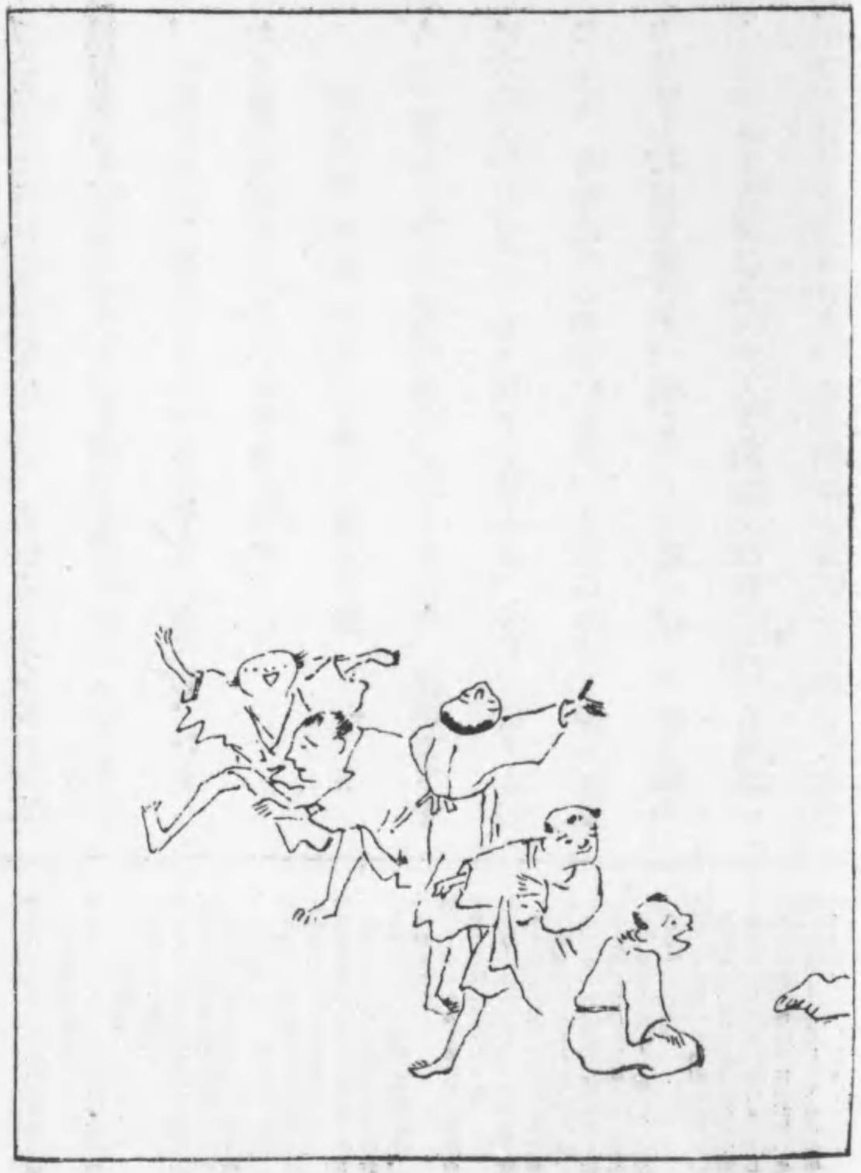
紙屑もぼたん貝ぞよ葉がくれに　一茶

蛙の野送

爰ら（此邊）の子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて、諷ふ（う）ていはく、ひきどのゝお死なつた、おんばくもつてとぶらひに〳〵〳〵、と口〳〵にはやして、茅苡の葉を彼

爰ら――柏原邊。
おんばく――おほばこ、おんばこ、かへるばなどともいふ。車前科に屬する多年生草本。長い葉柄を有する橢圓形又は卵形の葉は、宿根より叢生し、夏日その中央から花穗を出して、花を開き實を結ぶ。葉は食用、種子は藥用に供する。
茅苡――オホバコ。大葉子、車前、茅茸などともかく。
本草綱目――ホンザウカウモク。五十二卷。明人李時珍の編した支那古來の植物藥草學の書。品物一八五二種に就いて、正名・釋名・集解・辨疑・正誤をあげ、其の土產、形狀より氣味、主治、附方に至るまでを詳錄してある。

わざくれ――いたづれ。



うづめたる上に打かぶせて歸りぬ。しかるに本草綱目、車前艸の異名を蝦蟇衣といふ。此國の俗、がいろつ葉とよぶ。おのづからに和漢心をおなじくすといふべし。むかしはかばかりのざれどさへいはれあるにや。

卯の花もほろり〳〵や墓の塚　一茶

此もの、諸越の仙人に飛行自在の術ををしへ、我朝天王寺には大たゝかひにゆゝしき武名を殘しき。それは昔〳〵のとにして、今此治れる御代に隨ひ、ともに和らぎつゝ、夏の夕暮せどに莚を廣げて、福よ〳〵と呼べば、やがて隅の藪よりのさ〳〵這ひよりて人と同じく涼む。其つら魂ひ一句いひたげにぞありける。さる物から長嘯子の蟲合に歌の判者にゐ(え)らまれしは、汝が生涯のほまれなるべし。

ゆうぜんとして山を見る蛙哉　一茶

鶯にまかり出たよ引蟾　其角

思ふとだまつて居るか蟾　曲翠

一雫天窓なでけり引がへる　二茶

〔(頭書)電(イナヅマ)〕

そんじよそこ爰と青田のひいき哉　〃

闇の蚊のぶんとばかりに燒(カ)れけり　〃

鵜の眞似は鵜より上手な子ども哉　〃

寢並んで遠夕立の評義(議)哉　〃

留主中も釣り放しなる紙帳かな　〃

蝦蟇衣――隅名に「蝦蟇岩藏ニ伏于下」故江東稱爲(シテス)蝦蟇衣」

がいろつ葉――「がいろ」は蛙の說。かへるの葉の意。

ざれごと――戲事。

卯の花も――子供等がおほばこの莖をかぶせて作った墓の塚の上に、卯の花も悲しむが如くほろ〳〵と散る物あはれな風情。

此もの――墓。

諸越の仙人――蝦蟇仙人。

我朝天王寺に云々――延曆三年五月攝州四天王寺に於て、數萬の蝦蟇が三時餘り戰つたとの傳說（續日本紀、前々太平記等）。

福――福かへるともいふ。蟾蜍の方言。

せど――背戸。うらぐち。

長嘯子――木下勝俊。天說翁と號した。幼き時より豐臣秀吉に仕へて功多く、文祿三年には若狹に封ぜられ、小濱城主となつた。晚年には剃髮し、東山、大原野等に淋居して歌の道に親んだ。慶安三年卒、八十一歲。その歌集を「挙白集」といふ。

虫合――長嘯子の「虫歌合」に、鈴蟲月初の或夜、蟋蟀をはじめ三十類の虫が集まり、蚊の下の蟇を判者として、十五番の歌合を行つた事が書いてある。

歌の判者――蟲合に於て歌の優劣を判定する人。

ゆうぜんと――陶淵明、飲酒詩「采ル菊東籬下ニ、悠然見ル南山ニ」による着想。

其角――寶井氏。幼名は源助。順哲と稱した。寶井其角、晋子、狂雷堂等の別號がある。芭蕉高足の雄一。寶永四年二月歿、四十七歲。編著は「虎蕭」「枯尾花」等約三十種に及ぶ。

思ふこと――蟇が默々と腹をふくらせてゐる樣子に「思ふこと云はぬは腹ふくるゝわざ」といふ俚をきかせたもの。

曲翠――管沼氏。名は定吉。通稱外記。馬指堂と號した。芭蕉の門人。近江膳所の藩士。

引がへる――蟾蜍。

そんじよそこ――百姓達が神邊に立つて、思ひ〳〵爲賣々々にあたりの得用の稻の出來榮をほめそやしてゐる樣かなさまか。

闇の蚊の――蚊帳の中の蚊が紙燭の火に燒かれて、ぶんと鳴いて落ちる剩那の情景。

鵜の眞似――鵜の眞似する鵜の嘴を取つて、鵜より上手に水中に潜る子供のことをいつてゐる。

山番の爺が祈りし清水かな　〃

蓮の葉に此世の露は曲りけり　〃

狗に爰へ來よとや蟬の聲　〃

五月廿八日

とらが雨など輕んじてぬれにけり　〃

（一節及び一圓省略）

魚ともや桶ともしらで門涼み　一茶

とくかすめとく〳〵かすめ放ち鳥　大江丸

彼岸の蚊釋迦のまねして喰れけり

水ぶねにうきてひれふる生け鯉の

命まつ間もせはしなの世や　光俊卿

山番の爺が――山間、路傍などの清水には色々な傳説が附いてゐることがある。こゝは山番の爺が水の乏しきを厭いて山の神などに祈つて見出した清水であるといふ傳説をいふのである。

蓮の葉に――世に捨ねた一茶の人生觀の閃き。

とらが雨――虎が涙雨ともいふ。陰暦五月廿八日に降る雨。此の日大磯の遊君虎御前が愛人曾我祐成に別れた、その悲しみの涙が疑じて雨となつたとの傳説より起る。

魚ともや――囚れの身とも知らず、桶の中を泳しげに泳ぐ魚を憐んだのである。

彼岸の蚊――慶五「隨齋諧記」に「喰せけり」とあるに從ふべきであらう。釋迦の眞似は慶輝迦の眞似。横臥すること。横臥して彼岸の蚊に食はせたといふのである。

大江丸――大伴氏。名は政周。通稱宗二。舊國、回心齋等と號した。大阪の飛脚問屋鳥屋の主人である。巻太門。文化二年三月没、八十六歳。「俳諧哀」「俳諧梅」「あがたの三月四月」等の著がある。

水ぶね――生魚を入れておく水槽。

光俊――梅原氏。鎌倉時代の歌人。檢古今集の撰者。延治二年六月卒、六十七歳。

ふしづけしおどろが下に住むはへ（え）の　俊賴卿

心おさなき身をいかにせん

淺間山

雲貝、やぼつぼと燃る石ころへ　一茶

俳諧宗雲水に逢る

鬼茨も添て見よ〳〵一涼み　〃

古之爲闘也、將以禦暴。今之爲闘也、將以爲暴。

（頭書）孟子）

闘守りの灸點はやる梅の花　一茶

人聲に子を引かくす女鹿かな　〃

はつ螢其手はくはぬとびぶりや　〃

おらが春

ふしづけ――冬期柴を束ねて水中に漬けおき、魚が腐さを避けて其中に集まつたのを春に至つて掬み捕へる漁法。

はへ――鮠。骨鯉類に屬する淡水魚で、鮎に似る。

心おさなき身――ふしづけの下の身の危險を知らぬ愚かの身。

俊賴――源氏。平安朝末期の歌人。清新放膽な作風をもつて當代に鳴る。天治元年勅を奉じて金葉集を撰んだ。家集を「散木奇歌集」といふ。

雲貝や――翌日に燃えさかる石塊に、かよわき莖を出して這ひかゝる夕顔の生の強さ。木莊も水もない淺間山麓の石原の光景である。

俳諧宗雲水――俳諧を一つの宗派の如く考へ、行方定めぬ俳行脚の旅に出る人を雲水の僧と見たてたのである。

鬼茨も――鬼茨の陰にも立寄つて見よ、一味の涼風を得ることは出來る。とげ〳〵しいと思ふ人にも交つて見よ、得る所があるとの意を含める。

古之爲闘云々――孟子盡心下篇に見える闘守りの――梅の花の咲く二月灸の時節、月頃厳めしい闘守達の間にも、身を勞はつて灸を据ゑる事がはやつてゐるとの意か。

はつ螢――初螢の飛び來るのを打ち落さうと窓に待ち受けてゐると、間近になつてその手は食はぬといはぬばかりに、ついとそれて飛ぶ。

蓮の花少曲るもうき世哉〃

隈界(界隈カ)のなまけ所や木下闇〃

大沼

萍の花からのらんあの雲へ〃

越後

柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥〃

江戸住居

青草も銭だけそよぐ門涼〃

なでしこに二文が水を浴せけり〃

小金原

母馬が番して呑(飲)す清水哉〃

萍の――浮草の漂ふ廣い沼、その水平線上に漂く湧く白雲に寄せた感懷。

柿崎や――柿崎は今、新潟縣中頸城郡柿崎村の地。親鸞上人の舊跡。東遊記に「むかし親鸞上人柿崎に行き給て宿を乞ひ給ひしに宿のあるじ心惡敷ものにていろ〳〵いなみけるとぞ。是を柿崎のしぶ〳〵宿と云ひて其家の在りし跡今に殘れり。」この句は閑古鳥の物寂びた聲に「しぶ〳〵宿」の傳說を思ひあはせたものである。

青草も――庭とてもない貧屋の門先で、緣日あたりで買つた鉢植の廉い草の僅かな戀ぎに涼を納める人のさま。次の句と共に一茶が江戸時代の生活を想像させる。

二文が水――二文出して買ふ水。

小金原――今の千葉縣市葛飾郡小金町を中心として葛飾、印旛、千葉の諸郡に亙る荒野。德川時代にはこゝに上中下の三牧をおいて、官馬を放牧した。

風あるをもつて尊ふとし雲の峰〃

疫病神蚤も負せて流しけり〃

茂林寺

蝶〳〵のふはりととんだ茶釜哉〃

櫻迄惡く云はする藪蚊哉〃

蟻の道雲の峰よりつゞきけん〃

高井郡六川鄕六がはの里、山の神の森にて、栗三つ捨ひ來りて、庭の小隅に埋め置(き)たりしに、つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にて家に家を作り足しぬるからに、月日の惠みとゞかず、雨露の潤ひうとければ、其としやを

風あるを――實語教の「山高故不ㇾ貴、以ㇾ有ㇾ樹爲ㇾ貴」による着想。夏日の空に高く立つ雲の峯は涼風と相まつて始めて有りがたく尊しの意。

疫病神――疫病をはやらせるといふ神。疫病流行の時は疫神送と云つて、藁で疫病神の形を作り、鐘、太鼓で囃して野邊に送出して燒き、又は河海に流した。蟲塚を設け、その上いやな蚤まで賣はせた疫病神の像。

茂林寺――群馬縣邑樂郡六鄕村堀上にある曹洞宗の寺。寺號を青龍山といふ。文福茶釜の傳說で有名。

蟻々の――文福茶釜の狸の傳說のある茂林寺の境内にふわりと飛ぶ蝶に何となく怪異な氣分を感じて、蟻のとんだと、とんだ茶釜とをいひかけていふ。

蟻の道――夏の野中に、何處までも長々と續く蟻の列と、野の果に立つ雲の峰とを結ぶ微かにも亦美しい空想。

六がは――ロクガハ。今、信州上高井郡小布施村の一部落。栗の産地として知られる。

東隣――園右衛門の家であらう。

ら一尺ばかり伸びけり。しかるを此國のならひ、冬に成れば、東より西より南より北より、家の大雪をひたおとしに落し込むからに、恰も越のしら山、一夜に兀と涌出たるにひとしく、其山に薪水をはこぶ道を作るに、愛宕山の石段（段）登るがごし。漸二三月ごろ、おしなべて長閑なるに、隣〳〵の背戸畠は草木青みわたりて、花もまれ〳〵咲げるに、彼山はいまだ眞白妙に風冴へ（え）て、嚴寒を欺くけしきにて、やゝ卯月八日、髪（紙）さげ蟲の歌を厠に張（貼）るころ、山鶯の折しり貝に鳴けば、雪の消へ（え）口より見るに、哀なるかな、栗の木末は根際よりぽきりと折て仕廻（舞）ぬ。人ならば直に無常のけぶりと立昇るべきを、古根よりそろそろ青葉吹て、かろ（ら）うじて一尺ばかり伸けるを、又前のごく家の雪を落し込れてぽきりと折れ、年〳〵折れ〳〵て、とし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからなく、されど此世の緣盡ざれば枯も果ずして、生涯一尺程にて、生て居るといふばかりなるべし。我又さの通り、梅の魁に生れながら、茨の遲生へ（え）に地をせばめられつゝ、鬼ばゝ山の山おろしに吹折れ〳〵て、晴れ〳〵しき世界に芽を出す日は一日もなく、とし五十七年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也。しかるに、おのれが不運を科なき草木に及ずとの不便也けり。

なでしこやまゝはゝ木ゝの日陰花　一茶

越の白山——加賀の白山。

愛宕山の石段——江戸名所圖會に、愛宕山のさまを述べて「當山は懸岸壁立して空をしのぎ、六十八級の石階は曼々として雲をはさむが如く鬱然たり。」

髪さげ虫——糞尿中の蛆。俗に四月八日の朝甘茶で洗つて墨汁で「ちはやぶる卯月八日は吉日よ、かみさげ虫を成敗ぞする」と紙に記し、これを厠に貼つて、蛆ののぼつて來ない呪とする。

梅の魁——長男に譬へる。

茨の遲生え——意地悪き弟妹六をいふ。

鬼ばゝ山の山おろし——繼母の邪惡な心に譬へる。

露の玉の緒——露のやうなはかない命。

なでしこや——なでしこに幼子、まゝはゝ木に繼母の意を含ませ、繼母に虐げられる子の悲しい運命をうたふ。

日の上の——日の上の瘡を辛夷（コブシ）にかけ、邪魔者の榮えてゐるさまを憎んだ歌。

其引——前句に關係した古人の句を引用するとの意。

おらが春

さるべき因縁ならんと思へば、くるしみも平生とは成りぬ。

朝夕に覆(オヒ)かぶさりし目の上の
辛夷も花の盛り也けり　一茶

其引

子ばかりの蒲團に蘆の穂綿哉　山崎宗鑑
竹の雪はらふは風のまゝ子哉　正勝
うつくしきまゝ子の臾の蠅打(ダ)ん　紅雪
なげゝ迚蚊さへ寢させぬまゝ子哉　未達

子ばかりの――閔子騫の故事を踏まへ、繼母の冷酷な仕打を詠んだ句。子ばかりの蒲團は「まゝ」の附かない子即ち實子の蒲團の意か、子の蒲團ばかりといふ意か。穂綿は蒲、蘆などの穂を綿に入れたもの。

宗鑑――志那氏。名は範重。通稱彌三郎。近江の人。初め足利義尙の侍臣であつたが晩年山崎に草庵を結んで山崎宗鑑と號した。天文廿二年淸岐觀音寺の一夜庵に歿、八十九歲。俳諧の鼻祖と稱せられる。「犬筑波」を撰した。

竹の雪――雪の朝の寒い時分に竹の雪を掃ふ苦しい仕事をさせられるのは繼子であるといふのを、風の樂に物の動くが如く、繼母の心のまゝになる柔順な繼子にいひかけてある。

正勝――前田氏。西武門なる鶴竹軒光方の弟子。

うつくしき――繼子の面貌の美しきは却て繼母の嫉みの種である。こゝは蠅に託して繼子の顏を打つ繼母の情をいつてある。

紅雪――淸白齋と號した。備前の人。後淸岐に渡る。元祿六年三月歿。

なげけとて――唯さへ繼母に虐められてゐる上に、碎な蚊帳さへ與へられないのか、蚊に食はれて終夜眠られず、身の上を泣く繼子の上を詠んである。

未達――西村氏。名は久重。京都の人で、書肆を業とした。元禄の門下。

貞享四丁卯歌仙

葛の縄目をゆるされし文
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて　芭蕉

祇園拾遺

下部(僕)ひそかに首埋めける
繼母の又口ばしる夜の雨　未達

おく五歌仙

おらが春

葛の縄目を云々――「句餞別」によれば、貞享四年十月芭蕉が江戸深川の庵を立つて、上方の旅に上る時の餞別の連句十句の第六句第七句。尙前句は一千、後句は司雪。前句の意は葛で結れた手紙の結目を解いたことか。後句は、姑や夫を大切にするばかりでなく、繼子をもよく愛するといふので、善い嫁といふ評判を取つたといふ意。前句の葛の縄目をゆるされたといふのから、繼母に虐められる繼子を考へて附けたのであらう。

芭蕉――松尾氏。伊賀國柘植(又は上野)の人。初め藤堂家に仕へたが、二十三歲の時道世し、それより俳諧の道に精進して遂に風雅の誠を基調とする蕉風の俳諧を開くに至つた。晩年は江戸に庵を結んだが、多くは旅に過して風狂に心をやつした。元祿七年十月十二日、大阪の花屋仁左衛門の客舍に病歿、五十一歲。大津の義仲寺に葬る。その傑れた作品は俳諧史上不朽の光を放つてゐる。

祇園拾遺――俳諧祇園拾遺物語。二卷。池流亭松春撰。元祿四年春刊行。

下部ひそかに云々――「祇園拾遺」下卷所載の松春去來兩吟歌仙の第二十句及び二十一句。尙原本第二十句は松春であり、座七は「首埋みける」とある。前句は僕が或客の首を埋めた意を逢べてゐるので、その意から繼母が繼

山木かくれて草に血をぬる　芭蕉

わづかなる世をまゝ母に偽られ　風流

小さき土鍋のありけるを、我腹の子にとらせて、とらせざりければ、鶯の鳴をきゝてよめるとなん。

鶯よなどさはなきそちやほしき

小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立、と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に蹋りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。

我と來て遊べや親のない雀　六才　彌太郎

昔大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一椀見せびらかしていふやう、是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、まゝ子はひだるさたへがたく、石佛の袖にすがりて、しか〳〵ねがひけるに、ふしぎやな、石佛大口明てむし〳〵喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もぽつきり折て、それより我うめる子とへだてなくはごくみけるとなん。其地藏ぼさち今

子を憎んだ末殺したことを想像して、その罪の恐怖から氣が正つて、夜の雨の淋しき折など、その惡事を口走ることが度々あることをいつてある。

山木かくれて云々――元祿二年芭蕉が奥羽行脚の途次、羽前尾花澤の清風亭で巻いた歌仙の第八句及び第九句。第八句、つなぎ樋には、「山はこがれて石に血もぬる」、一蕉集には「山はこがれて草に血をぬる」とあり、第九句中七は兩書共「世をキ繼母に」とある。これらの内つなぎ樋の句が最も意が通つてゐる。「山はこがれて」は千慧で山の木も焦げてゐる。一面欲しいのである。それと宇治拾遺物語にある石卒都婆に血を塗つて大雨降つた傳説を持つて來て、雨乞をする意をいつてゐる。

風流――出羽國新庄の人。芭蕉が奥細道行脚の途次こゝに立ち寄つてゐる。

小さき土鍋云々――この話は清輔奥草紙卷四幼兒話の條による。

とらせざりければ――繼子に取らせなかつたから。繼子に與へなかつたから。

なきそ――泣くその譏り。

貫之娘――紀内侍。蜻宿梅の一事によつて名高い。古今六帖の撰者と傳へられる。この歌を貫之娘の作とすることは既に「西公談抄」「支考の「笈日記」等に見えてゐる。

爪を咥へて――指をくはへてともいふ。物欲しげなさま。德を羨むさま。

我と來て――孤獨の淋しさを親めない雀の子と分ちあはうとするみなし兒の可憐な心情の表白。

六才彌太郎――彌太郎は一茶の幼名。この署名によつて雀子の吟は六才の作と傳へられてゐるが、實際は六才の頃を思ひ出して晩年に作つたもの。

立田――今の奈良縣生駒郡龍田村、三郷村の地。三室山、龍田山、奈良志圖等によつて古來有名な所。

むくつけき――恐しき。

咽を十日粽ほして――十日ばかり飢餓させて。十日ばかり飲食物を與へないで。

ひだるさ――ひもじさ。

むし〳〵――むしや〳〵。

角――意地。

ぼさち――菩薩。

にありて、折〳〵の供物たへ(え)ざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風　一茶

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂(繁)きうき世に生れたる娘、おろかにして、ものにさとかれ迚、名をさとゝよぶ。とし誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵あはゝ、天窓てんてん、かぶり〳〵ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづがれば、とみにとらせけるを、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば、誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく、清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なか〳〵心の皺を伸しぬ。又人の來りて、わん〳〵はどこにといへば犬に指し、かあ〳〵はと問へば烏にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛敬(敬)こぼれてあひ(い)らしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺へ(え)侍る。此おさな、佛の守りし給ひけん、迨夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして鈴(鈴)打ならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちい(ひ)さき手を合せて、なんむ〳〵と唱ふ聲、しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝

竹植うる日――陰暦五月十三日。この日を竹酔日又は竹迷日と稱し、竹を植ゑれば必ずつくといはれる。さと女の出生は五月四日である。

うき節茂き――つらい事の多い。竹の縁で節といつたのである。

おろかにして云々――小賢しからず素直で、しかも物わかりのよいやうにとの意か。

てうち〳〵云々――何れも物を覺え初めた幼子の身振。てうちはチョウチとよむ。兩手の掌を打合はせて音をたてること。あはゝは掌で口を掩つたり放たしりしながらアワワと發音する。天窓てん〳〵は頭上を叩く。かぶり〳〵は頭を左右に振る。

心の皺を伸しぬ――老の心のうさたはらした。老人の心の慰となつた。

佛の守したまひけん――人の傳する代りに佛が傳し給ひけんの意で、死んだ佛の愛を受けること。

迨夜――忌日又は命日の前夜。

持佛堂――持佛又は父祖の位牌などを安置する堂。佛間。

也。それにつけても、おのれかしらにはいくらの霜をいただき、額にはしは／＼波の寄せ來る齡にて、彌陀たのむすべもしらで、うか／＼月日を費やすこそ、二つ子の手前もはづかしけれと思ふも、其坐(座)を退けば、はや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、剩、佛のいましめし酒を呑(飲)む。折から門に月さしていと凉しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、ただちに小椀投捨て、片い(ゐ)ざりにい(ゐ)ざり出て、聲を上げ手眞似して、うれしげなるを見る(に脫カ)つけつゝ、いつしかかれをもふり分髪のたけになして、お(を)どらせて見たらんには、廿五井(菩薩)の管絃よりも、はるかまさりて興あるわざならんと、

是ヨリ見ルニッケツ、迄小兒ノサマ

地獄の種を蒔きて——地獄に落つべき罪障をなして。

片ゐざり——片足は膝をたて、片足は地をすつて小兒などが傍に這ひ行くこと。

ふり分髪のたけ——振分髪を結ふ程の大さ。振分髪は髪毛を左右へ分けさばいて、其儘垂した男女小兒六七歳前後の髪の結方。

二十五菩薩——念佛行者が終命の時、彌陀に隨從して、極樂淨土より來迎するといふ二十五の菩薩。卽ち觀音、大勢至、藥王、藥上、普賢、法自在、獅子吼、陀羅尼、虛空藏、德藏、寶藏、金藏、金剛藏、光明王、山海慧、華嚴王、珠寶王、月光王、日照王、三昧王、定自在王、大自在、自象王、大威德王、無邊身。

我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。かく日すがら、をじかの角のつかの間も、手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から、朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯焚そこら掃かたづけて、團扇ひら／＼汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺る相(合)圖とさだめ、手かしこく抱き起して、うらの畠に尿やりて、乳房あてがえ(へ)ば、すは／＼吸ひながら、むな板のあたりを打たゝきて、にこ／＼笑ひ顏を作るに、母は長／＼胎内のくるしびも、日々／＼襁褓の穢らしきも、ほと／＼忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになでさすりて、一入よろこぶありさまなりけらし。

日すがら——日ぬもすの意。誤用である。

をじかの角の——夏の鹿の角の短いところから東の間の序としたもの。萬葉集卷四「夏野行く牡鹿の角の束の間も、妹が心を忘れて念へや」

物から——ものだからの意味に用ひてある。正當の用法ではない

母——きく女。柏原の隣村野尻村赤川、常田久右衛門の女。文化十一年四月一茶に嫁し千太郎、石太郎、さと、金三郎の三男一女を擧ぐ。文政六年五月十二日歿、三十七歳。

正月と思ひ——正月にあつた思ひでをつとして、始めて氣樂を感ずること。

衣のうらの玉——法華經五百弟子受記品に見える寓話。或人が親友の家に行き、酒に醉つて寢て居る間に親友が衣の裏に縫いで與へた無價寶珠の事。この珠をしの欲するものと交換するに意の如くならぬものはないといふ。こゝでは大切な物に譬へる。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉　一茶

より〳〵思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ。

柳からもゝんぐあゝあと出る子哉〃

蓬萊になんむ〳〵といふ子哉〃

年問へば片手出す子や更衣〃

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷〃

名月を取てくれろとなく子哉〃

子寶がきやら〳〵笑ふ榾火哉〃

あこが餅〳〵とて並べけり〃

妹が子の脊負ふ(う)た形りや配餅〃

もゝんぐあ――むさゝびの事。こゝでは着物を被り臂を張り、むさゝびの類を張つた眞似をして戯す子供等の戯れ。

蓬萊――新年の飾りの一種。多く三寶に米を盛り、その上に熨斗鮑、昆布、野老、馬尾藻などを飾る　この句は蓬萊に向つて手を拍せ、片言の念佛を唱へるあどけない幼兒のさまである。

てんつるてん――つんつるてんとも云ふ。ゆきたけの短い着物を着たさまをいふ。

子寶が――笑ひさざめく兒兒を中心に、炉の火を圍んで、一家團欒の狀景。

あこが餅――子供が、拵いた餅を、これもあたいが餅、これもあたいが餅と並べてゐる無邪氣なさまである。

妹が子の――小さい妹姉が赤兒を背負うて、近隣に餅を配る姿のをかしげにほゝゑましげなこと。

餅花の木陰にてうちあはゝ哉〃

涼風の吹く木へ縛る我子哉〃

わんぱくや縛られながらよぶ螢〃

其引

あゝ立たひとり立たるとし哉　貞德

子にあくと中人には花もなし　芭蕉

袴着や子の草履とる親心　子堂

花といへも一ついへやちい(ひ)さい子　羅香

春雨や格子より出す童の手　東來

早乙女や子のなく方へ植て行　葉捨

餅花――樹の枝に多くの小餅を挿して花の如く仕立てて飾るものである。

涼風の――子を折檻するにも親の慈愛の籠つた心遣ひか、或は父母が仕事をする間遊ぐ紐ひ出さぬやうに、涼しい木蔭に縛つて置くのか。

貞德――松永氏。幼名鶴龍。遺遙軒、長頭丸等の別號がある　細川藩士に就いて歌道の奥を究め、里村紹巴に連歌を学び、貞門の俳諧を始した。寛德二年十一月歿、八十三歳。「淀川」「油囊」「御幸」等の著がある。

子にあくと――子を愛することを知らぬ人には實もなければ花もないとの意。

袴着――男子五歳の時初めて袴を着ける氏神に詣でる儀式。十一月十五日に行はれる。

子堂――この句は「雜談集」卷上に見えるが、傳不詳。

羅香――この句は「笈日記」卷上に見えるが、傳不詳。

東來――山岸氏。宇六と稱した。伊賀上野の人。芭蕉の門人

葉捨――「句兄弟」卷下には葉拾として出てゐる。

折とても花の木の間のせがれ哉　其角

はしとり初たる日

鶯鳴や赤子の頰をすふ時に　仝

男にきらはれて親のもとに住みけるに、おのが子の初節句見たくも、晝は人目茂(繁)げくれば、

去られたる門を夜見る幟かな　よみ女しらず

子を思ふ實情さもと聞へ(え)て哀也。猛(猛カ)きものゝふの心を和らぐるとは、かゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも風の便りにもきゝなば、いかでかふたゝび呼び歸さゞらめや。

所有斎類是レ世々ノ親族ナリトなん、親をしたひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

人の親の烏追ひけり雀の子　鬼貫

夏山や子にあらはれて鹿の鳴　五明

負て出て子にも鳴かする蛙哉　東陽

鹿の親笹吹く風にもどりけり　一茶

小夜しぐれなくは子のない鹿に哉　〃

子をかくす藪の廻りや鳴雲雀　〃

樂しみ極りて愁ひ起るは、うき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛

折とても――花を折らうとしても花間に遊ぶ我が子の事が案じられるとの意。

鶯鳴や――鶯はもず、百舌鳥。雛鳥の頻に囀鳴する時、鶯の強い勇ましい鳴聲を聽く。

猛きものゝふ云々――古今過假名序「猛き武士の心をも慰むるは歌也」による。

鬼貫――上島氏。名は治房、攝津伊丹の人。初め重頼、宗因の門に入つたが、後「誠の外に俳諧なし」と喝破して一家をなした。元文三年八月歿、七十八歳。「七車」「ひとりごと」「鬼貫句選」によつて彼の俳論俳句が窺はれる。

人の親の――子を持つ親の人情から、雀の子の爲にこれをいぢめる烏を追うてやつたといふのである。

夏山や――夏山の茂みに隱れた鹿も、子の爲に鳴いて、姿を現はした。

五明――吉川氏。名は了爾。小夜庵、一方庵等と號した。秋田の人。拖鬼の門人である。享和三年十月歿、七十三歳。

負うて出て――蛙が子を負うて出て、自分も鳴き、子にも鳴かするをいつたものである。

東陽――尾張の住。蒔々庵と號した。文化年中の人。

鹿の親――笹吹く風の音に木蔭に隱した子が案ぜられて歸つた親鹿のやさしい心づかひを詠じたもの。

に哉――にがなあらんの意。

子をかくす――子を隱して置く巢のある藪の周りに鳴く雲雀を詠んだもの。雲雀は巢を人に發見されないやうに、降りるにも先づ巢より少し離れた處に降りるといふ。

樂しみ極りて云々――淮南子、張湍古大寶箴「樂不可極、樂極生貧」

りなる綠り子を、寢耳に水のおし來るごき、あら〳〵しき痘の神に見込れつゝ、今水濃（膿）のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日經たれば、痘はかせぐちにて、雪解の峽土のほろ〳〵落るやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやして、さん俵法師といふを作りて、笹湯浴せる眞似かたして、神は送り出したれど、益〳〵よはりて、きのふよりけふは賴みすくなく、終に六月廿一日の彝の花と共に此世をしぼみぬ。母は死貝にすがりて、よゝ〳〵と泣もむべなるかな。この期に及んでは行水のふたゝび歸らず、散花の梢にもどらぬくひ（い）どなどゝあきらめ

五〇

みどり子――嬰さと女を指す。
痘の神――痘瘡の神。厄病の神。
かせぐち――痘瘡のからびかゝること。
さん俵法師――米俵の兩端にあてる藁製の蹈く耳たい蓋。
笹湯――昔、小兒の痘瘡の癒えた後、酒を混へてつかはせた湯。
行水のふたゝび歸らず――諺。過ぎ去つたものは　つても及ばない。
散花の梢にもどらぬ――同前。傳燈錄「落花篇」上枝」

貝しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな也けり。

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

去四月十六日、みちのくにまからんと善光寺迄歩みけるを、さはる事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらん迚、道祖神のとどめ給ふならん。

其引

子におくれたるころ

似た貝もあらば出て見ん一踊　落梧

母におくれたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮　尙白

露の世は――我が兒の死に對して、諦めようとして、諦らめきれぬ悲哭。
善光寺――善光寺町。今の長野市。
道祖神――道路を守護する神、ふなとの神、さへの神。
似た頭も――「度日記」「俳諧寂栞」共に「似た頭の」とある　盆踊りの踊子の中に死んだ我が子に似た貌もあらば、出て見たいと思ふ親心。
落梧――加島氏。通稱長良川の人。芭蕉の門人。元祿四年歿。
尙白――江左氏。名は三益。木節、芳齋、老長子と稱した。初め貞室、不卜の門人。後蕉門に屬した。伊勢の人。近江大津に住して醫を業とした。享保七年七月歿、七十三歳。
夜の鶴――「五元集」「類柑子」等には、初五「霜の鶴」とある。親の慈愛を表したさに「燒野の雉子、夜の鶴」といふを取つて、霜夜の鶴はその羽翼で我子を覆ふと聞いてゐるが、捨つた子の土饅頭に霜除の蓆圍を被せるわけにも行かぬと寒切な親の心情を述べたもの。
宿を出て――家に居れば雖の事が想ひ出

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて、三月三日

野外に遊ぶ

宿を出て雛忘れば桃の花　猿雖

娘身まかりけるに

十六夜や我身にしれと月の欠　杉風

猫子母に放れしころ

柄をなめて母尋るやぬり團扇　來山

愛子をうしなひて

春の夢氣の違はぬがうらめしい　仝

されて亡き孫娘の悲しさに堪へないから、それを忘れる爲に、家を出て野外に行けば、そこには桃の花があつて、又孫娘の俳句の事が思はれて悲しい。

猿雖――蓼山氏。通稱は内藤惣七郎。西鶴庵、東麓庵、蓼專等の別號がある。伊賀上野の人。芭蕉の門人。

十六夜や――娘を失つて我が幸福の一角の失はれたことを、十五夜の滿月が十六夜になつて少しく缺けたことに掛けて詠んだ句。

杉風――杉山氏。名は元雅、通稱は鯉屋市兵衛。採茶庵、五雲亭等多くの別號がある。江戸の人。幕府の御用御納屋を勤めてゐた。蕉門十哲の一人。享保十七年六月歿、八十六歳。「杉風句集」がある。

猫子――兄弟の子。甥、姪。禮記、檀弓「兄弟之子、猶子也」

柄をなめて――涂團扇の柄をなめ〳〵亡き母を慕しがる幼子の哀れなさま。

來山――小西氏。通稱伊右衛門。十万堂湛々堂等の號がある。初め由平に師び後宗因の門に入つた。大津の人、攝津の今宮に住んだ。享保元年十月歿、六十三歳。句集に「今宮草」「續今宮草」がある。

春の夢――春の夢の如く幼くして果敢なく消えた我子を思ふ情の堪へがたさに、寧ろ我が氣の狂うてこの悲しみを

子をうしなひて

蜻蛉釣りけふはどこ迄行た事か　千代

やんどなき人〳〵の歌も心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

よみ人しらず

哀也夜半に捨子の泣聲は

母に添寢の夢や見つらん　爲家卿

捨て行く親したふ子の片い(ゐ)ざり

世に立かねて音こそなかるれ

人の親の心は闇にあらねども　兼輔卿

おぼえなければよいといふのである。

蜻蛉釣り――俳家奇人談に始めて見える。出自不明の爲疑問視されてゐる句である。我子が死んでも、本當にこの世にゐないといふ氣がしない、今日も亦例の通りに蜻蛉釣りにでも行つてゐるやうに思はれるといふ親の眞情の表白。

千代――加賀松任の表具師福嶋屋大兵衛の女。金澤藩の足軽、福岡弘八に嫁したといふ。支考や麻元坊に接して多く美濃派の影響を受け、女流俳人として最も名高い。安永四年歿、七十三歳。「千代尼句集」がある。

爲家――藤原氏。鎌倉時代の歌人。續後撰集、續古今集の撰者。建治元年歿、七十九歳。

兼輔――藤原氏。平宗朝末期の歌人。三十六歌仙の一人。承平三年歿、五十七歳。世に堤中納言といふ。

子を思ふ道に迷ひぬる哉

頌曰

未學歩時先已到　未動舌時先說了
直饒著ゝ在機先　更須知有向上竅

〔(頭書)著ミハ碁ノ言バ、一手ミミと云心也〕

貰ふよりはやくうしなふ扇かな　一茶

俄川とんで見せけり鹿の親

大寺や扇でしれし小僧の名

曲者隠れてうかゞふ圖

あばれ蚊のついと古井に忍びけり

大山詣

頌――偈語。偈に同じい。佛の功德を讃歎し、又は法の道理を稱揚する詩句。

俄川――夕立などで急に出來た川。見せけりは我が子に飛越ゆる術を教へたのである。

大寺や――大寺のことで、多くの小僧等もゐることであるが、扇に書いた名でこの小僧の名が知れた。

あばれ蚊の――亂暴に我を刺した蚊が古井に誘れて行つをかくしたことによつて興意を間接に現した句。

大山詣――相模國中郡に聳える大山の阿夫利神社に參詣すること。舊曆六七月の頃は參詣人殊に多く、諸人多くは大願成就の四字を記した木太刀を納め、先に納めた太刀を持ち歸つて守とする風習である。而してその納太刀は大きい程見榮とされてゐた。

四五間の木太刀をかつぐ袷かな　〃

太郎冠者ゑがひに通る扇かな　〃

紫の里近きあたり、とある門に、炭團程なる黒き巣烏をとりて、籠伏せして有りけるに、其夜親烏らしく夜すがら其家の上に鳴ける哀さに、

子を思ふ闇やかはゆい〳〵と

聲を烏の鳴あかすらん　一茶

盗人おのが古郷に隱れて、縛れしに、

業の烏罠を巡るやむら時雨　〃

御成り場所に、烏どもの餌蒔をしたふ不便さに、

太郎冠者――武家で、年若い召使の中、最も先輩の者の稱。こゝでは狂言大名物に出る滑稽な人物。句は、鐘を手にして、狂言の太郎冠者に似た歩き風して通り行く人物を詠じたもの。

紫の里――信州上高井郡高井村の一部落。こゝには一茶の門人久保田春耕などが住んでゐた。

巣烏――未だ巣立たない雛烏。

籠伏せして――籠を伏せて、その中に烏を入れておく。

子を思ふ――闇は前出の古今集なる餐鳥の歌の詞と、夜の闇とを掛けてある。

かはゆい〳〵に烏の鳴聲をきかせてゐる。

業の烏――業は佛法の業、業の烏に盗人をきかせ烏が罠の危險に近づく如く、盗人が危險な故郷に近づくを寄せて出來た句。

御成り場所――將軍のおなりの場所。こゝは狩場であらう。

餌蒔――烏を集める爲にまいた餌。

不便さ――いたらしさ。

人眠き鶴よどちらに箭があたる　〃

箭の下に母の乳を呑(飲)む鹿子哉　立志

さすがのさつ男も髭切りしは、かゝるお(を)りになんあり

ける。

おのれ住る郷は、おく信濃、黒姫山のだら〳〵下りの小隅なれば、雪は夏きへ(え)て霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、萬木千草上ゝ國よりうつし植るに、と〴〵く變じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻(舞)けり　一茶

鎭西八郎爲朝人礫うつ所に、

人眠き――人間に親しみて餌に寄る鶴どもの中で、どの鶴が不幸に斬にあれるのだらう。運命の眞れさをいふ。

立志――高井氏。松樂軒、和歌堂と號した。京都の人。

さつ男――かりうど。

髭切りしは――獵師が、自己の職業の淺ましさを感じて僧となつた話はいろいろ傳へられてゐる。こゝはそれらを指してゐるのであらう。

おのれ住る郷――柏原。

黑姫山――柏原の西に聳える。標高六千七百尺餘。東に斑尾、西に戸隱、南に飯綱、北に妙高の山々を望み、山容亦秀麗である

物から――こゝも「ものだから」の意。

橘のからたちとなる――風土の異なるによつて、物の性質の變ずる譬。說苑「江南有レ橘、齊王使ニ人取ヲ之、而樹ニ之於江北ニ、生不レ爲レ橘乃爲レ枳、所ニ以然ニ者、其土地使ニ之然ニ也」

九輪草――櫻草科の多年生草本。山間陰濕の地に自生し、又觀賞用としても栽培される。五月頃整間より一二尺の花莖を出し、其の頂に近く紅色又は帶紫色の花を數段に輪生する。その樣が塔の九輪に似てゐるのでこの稱がある。

句の意は、氣候寒く、自然その生育に適しないので、滿足に花が咲かず、九輪草が四五輪草といふべき程度に咲いて、お仕舞につた。

時鳥蠅蟲めらもよつく聞けゝ
鹿の子や横にくはへし萩の花ゝ

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる圖に、

我汝を待と久しほとゝぎすゝ

幽栖

我家に恰好鳥の鳴にけり　一茶
二三遍人をきよくつて行螢ゝ
飛螢其手はくはぬくはぬとやゝ

成蹊子こぞの冬つひに不言人と成りしとなん、鶯笠のもとより此ごろ申おこせたりしを、

〔（頭書）史記李廣傳ガ贊ニ桃李不言下自成蹊〕

恰好鳥――我が幽栖に丁度ふさはしい鳥が鳴いたの意。恰好の音に郭公鳥の同音をかけてある。物寂びた郭公の音には幽栖の感じと一脈相通ずるものがある。

きよくつて――からかつて。

飛螢――闇中に潜んで打落さうとすると、間近く來てはついと逃げること數度である。それを其手はくはぬといつたのである。

鶯笠――田川氏。自然堂、對竹、鳳朗等の號がある。肥後熊本の藩士。晩年江戸に住した。蒼虬、霞家と共に天保の三大家と稱せられる。弘化二年十一月歿、八十四歳。「芭蕉布卿」「師說錄」等の著があり、句集も數種出てゐる。

老翁岩に云々――黄石公が不邪の圯上で張良に兵書を授ける圖。

我汝を待つこと久し――我汝を待つこと久しは、圯上の老翁の張良にいつた言葉である。

つの國の何を申も枯木立ゝ
白笠を少さますや木下陰ゝ
まかり出たるは此藪の墓にて候ゝ
雲を吐く口つきしたり引墓ゝ
赤い葉の榮耀にちるや夏木立ゝ
稲妻や一切づゝに世が直る　一茶
石川はくは(わ)らり稲妻さらり哉ゝ
夕霧や馬の覺へ(え)し橋の穴ゝ
秋風に歩て逃る螢かなゝ

二番休

乳呑子の風よけに立かゝし哉ゝ

おらが春

津の國の――津の國の難波の「なに」を何の「なに」に掛けて、何を云ふも、死んでしまつた今となつては、最早致し方がないと、深く友の死を悼んだのである。

白笠を――嘸暫し木蔭に立休らつたこと。少しさますは笠が少し熱氣をさました程の僅かの時間休んだ意。

雲を吐く――紅衒の墓にはよく雲を吐く圖が書いてある。これをもとにして空想。

赤い葉の――青々とした夏木立の中に赤い病葉がひら〳〵と三四片散る。唯さえ緑の美しい夏の木立の中に秋の風情の紅葉の散るのは人間らしい哀愁さを感じるのである。

稲妻や――稲妻が多い年は稲のみのりがよいと昔から言ひ傳へてゐるので、その一閃毎に世がよくなつて行くとの意。

石川は――秋、水が枯れて石ばかりの川原が、さらりと光つた稲妻に照し出された刹那の景。

夕霧や――夕霧の立ち籠めて定かならぬ田舍道を、通り馴れた馬はくづれかゝる土橋の穴も巧によけて行く。靜かな農村の秋の夕暮である。

秋風に――飛ぶ力も失せた螢が、秋風の吹く中を弱々しく歩いて逃げるあはれな樣。

二番休――田島に働く農人達の午後の小

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮〃

七月七日墓詣

一念佛申だけしく芒哉〃

木啄のやめて聞かよ夕木魚〃

木つゝきが目利して居る菴哉〃

經堂

蟲の屁を指して笑ひ佛哉〃

得手ものゝ片足立や小田の雁〃

山寺や椽の上なる鹿の聲〃

下手笛によつくきけとやしか(の脱カ)聲〃

休みをいふ。

一人通ると――今停車場の告知板に書くと同じ目的で、連れの人に對して、知らせる爲に、往來に沿つた家の壁に一人先へ行くといふ意を書きつけるといふのである。秋風に一人旅する人の淋しさが感じられる。

一念佛――七月七日墓參して、墓前に一念佛申す間、ほとりの芒を折り敷いて膝まづくをいふのである。

木啄の――木啄は啄木鳥、又寺つゝきともいつて、寺、僧侶に縁のある鳥である。コツ〳〵と啄木鳥の啄いてゐた音がぴたりとやんで、あとには木の間に夕方の看經の木魚の音が侘しく聞えてゐる趣。

目利――物の眞偽良否を見分けること。句の意は啄木鳥が庵の柱などを啄いてゐる樣子が、庵を目利でもしてゐるやうである。

經堂――寺院で一切經を納めて置く堂。

笑ひ佛――傳大士のこと。名は筠、字は玄風。支那南齊の頃の道士で、始めて輪藏を造つた人。常に微笑してゐたのでこの名があるといふ。經堂には大士が普成、普建の二童子を作つた像が記られてある。經藏の經卷についた紙魚の類を虫といつてゐるか、その屁など人に感ぜられるものではないが、それを想像した所に滑稽がある。

得手もの――得意。

茸狩のから手でもどる騷かな〃

さと女卅五日墓

秋風やむしりたがりし赤い花〃

さをしかの喰こぼしけり萩の花〃

我やうにどつさり寢たよ菊の花〃

のらくらが遊びかげんの夜寒哉〃

露の玉つまんで見たるわらは哉〃

立よらば大木の下迚、大家には貧しき者の腰をかゞめて、おはむきいふもとはりになん。爰の諏方(訪)宮に大きさ牛をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は菓(果)一つもあらざりけるに、其下をゆきゝする人、日〳〵とり得ざるは

下手笛――下手な鹿笛。鹿笛は鹿を誘ひ出す爲に獵師の吹く笛。

立よらば大木の下――俚諺。依頼するには勢力ある者を選ぶべきであるとの意。

おはむき――詔ひ。お世辭。

諏訪宮――柏原村の鎮守の社。今も境内に栗の古木がある。

大さ牛をかくす――莊子、人間世篇「豆石之と齊、見ゝ機此樹ゝ、其大蔽ゝ牛、絜ゝ之百圍。」

なかりけり。

十五夜は高井野梨本氏にありて、

古郷の留主居も一人月見哉　一茶

月蝕皆既　亥七刻右方ヨリ缺、子六刻甚ク丑ノ五刻左終

人數は月より先へ缺けり〻

人の世は月もなやませ給ひけり〻

潛(借)上に月の缺るを目利かな〻

酒盡てしんの坐(座)につく月見哉〻

おのが味噌のみそ喫をしらず

蕎麥國のたんを切つゝ月見哉〻

九月十六日正風院菊會

高井野――信州上高井郡高井村の地。

梨本氏――稻長。通稱儀助。高井村揚之内の人。一茶の門人。天保十二年七月歿。

故郷の――故郷柏原の草庵に留守居の妻菊女を思つての吟。

人數は――月の缺けない内に、月蝕を見る人の一人去り二人去りして歳の次第に淋しくなつて行くさま。

人の世は――月蝕を月のわづらひと觀じたのである。

借上――思ひあがつて、口はばひろく高ぶること。句は月を奪掠した古人の心持ちである。

酒盡きて――酒のある間は、他所することもなく、獨り月を見ることもなく、酒を飲んで樂しんだが、愈酒盡きて眞に月を見るべき座についたといふのであらう。

たんを切つゝ――蕎麥は信濃、信濃は寒い國故、秋の月見をするにも痰を切るのである。寒い信濃の國人はその國の寒いといふ弱點を知らざるを、味噌の味噌喫を知らざるに富てた句。

正風院――佐藤魚淵の亭。

鍬さげて神農貝や菊の花　〃

菊園や歩きながらの小盃　〃

杖先で畫解する也きくの花　〃

入道の大鉢卷できくの花　〃

下戸菴が痴也こんな菊の花　〃

さと女笑臭して夢に見へ(え)けるまゝを

頬べたにあてなどしたる眞瓜哉　一茶

どう追へれても人里を渡り鳥　〃

山雀の輪抜しながらわたりけり　〃

鴉の聲かんにん袋きれたりな　〃

蟷螂や五分の魂是見よと　〃

神農――農事を開きこれを民に教へし支那太古の聖王。史記、三皇記「炎帝神農氏、姜姓、中、火德王、號曰神農、斲木爲耜、揉木爲耒、耒耜之用、以教天下人」。

菊園や――其角の「その花に歩きながらや小盃」の句による着想か。菊園の中の雅びやかな遊興で、園中を歩いて花を賞しながら、小盃に酒を傾けるのである。

畫解――畫の解說をすること。

下戸庵が――菊の花の見事なのを見るにつけて、菊園の主人の下戸であるのを惜しく思ふの意。

どう追れ――渡り鳥の中には田畑果樹に害をなすものがある。それは人里に入つては人に追はれる。この句は、渡り鳥の境涯であるが、又一茶自身の告白でもあるかも知れない。

山雀――ヤマガラ。雀目鳥類の一種で形は頬白に似る。頭部は茶褐色で眼邊に黑條があり、背部は灰赤色、腹部は淡黃色、他は總て黑色である。山林に棲み昆虫を捕食する。性質敏捷で人に馴れやすく、教へれば種々の藝をするので廣く愛飼される。輪抜は輪ぬけ、輪の中を潜る藝當。それに類した軽い身のこなしを見せて、渡り行く意。

蟷螂や――蟷螂の鎌をふりたてた、いかつい樣を、「一寸の虫にも五分の魂」といふ諺に思ひあはせて作つた句。

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる故郷山　〃

行灯を松に釣して小夜砧　〃

行な鴈住ばどつちも秋の暮　〃

若僧の扇面に

影法師に耻よ夜寒のむだ歩き　一茶

こんな村なんとの行か渡り鳥　白飛

藪陰やとし酒屋のとし酒　士英

老樂

子どもらを心でお(を)がむ夜寒哉　一茶

蜂のとぶや唐箕のほこり先　〃

秋風や――丘の高みに登り、吹く秋風の淋しさに故郷の山が懐しまれて磁石に當てゝその方角を見るといふ、旅の佗しい心である。

行な鴈――「往めば鴈」といふ諺や、良暹法師の「いづこも同じ秋の夕暮」の歌によつて構想した句。

影法師――寒月の光にうつる自分の影法師を見て、我が身を恥ぢて、夜歩きを謹めよと、訓戒の句。

なんどの――「隨齋筆記」に「なんのと」とある。これがよからう。すると句意は、こんなつまらない村のなんのと不平をいつて、他へ渡り行くか、渡り鳥といふのである。

士英――西島氏。名は年。諱は周璋。字は早龍。信州上水内郡長沼村の人。書を東都の市川米庵に學んで不堂と號し能書家として知られてゐた。一茶の門人。天保十三年十一月歿、五十九歳。

子どもらを――子供等に囊はれ一遍の身を嘆しむ人の心を詠じた句。子供に感謝する有り難い親の心を詠んである。

蜂のとぶや――蜂はコホロギと訓む。唐箕は穀物の實と塵、屑殻、埃塵とを吹き分ける農具。句意は唐箕の口から飛び散る埃の先に蜂の飛ぶ樣。

小菊なら縄目の耻はなかるべし

戸迷ひせし折からに

小便所爰と馬よぶ夜寒哉

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥

さをしかやゑひしてなめるけさの霜　一茶

狼は糞ばかりでも寒かな

一つかみ塗樽拭ふ紅葉哉

むら千鳥そつと申せばばつと立

炭の火や朝の祝義(儀)の咳ばらひ

三介が敲く木魚もしぐれけり

木がらしやから呼されし按摩坊

小便所――夜寒に小便に起きて戸惑ひしてゐると、馬のひゝと鳴くのが聞えた。農家の常として便所は厩舎に接して造つてあるので、便所の所在がわかつたといふのである。

ゑひして――お互に。助け合つて、互に

背中の霜をなめ合ふといふのである。

狼は糞ばかり――山に入つて狼の姿は見ず、その糞は見たばかりでも恐ろしい。この戦慄を感ずる恐ろしさに寒さを配して作句したものである。

一つかみ――一掴みの紅葉に塗樽の柒を拭つて酒を酒み交さうといふ、親族の一狀景。塗樽は漆塗の樽で、酒を容れるに用ゐる。

渚千鳥――「そつと申せばはつと申す」といふ地口を文なして渚千鳥の小さい人聲に一時に飛立つ樣を詠じたのである。

善光寺門前憐乞食

重箱の銭四五文や夕時雨

大根引拍子にころり小僧かな

はつ雪の降り捨てある家尻哉

木がらしや折介歸る寒さ橋

菜畠を通してくれる十夜哉　一茶

雪ちるやおどけもいへぬしなの空

能なしは罪も又なし冬籠

強盗はやりければ

張番に菴とられけり夜の霜

彼是といふも當坐(座)ぞ雪佛

重箱の――蕭條と降り注ぐ時雨の夕、剃げた重箱に散らばる四五文の銭を前に蹲まる乞食の哀れなさま。

大根引拍子に――力を出して大根を引く拍子に、力餘りてころりと倒れた樣。

はつ雪の――初雪のことであるから、降つてからやがて消えたが、屋後の日陰にはなほその雪が殘つてゐるといふ樣。

折助――武家で使役する奴僕。

十夜――十夜念佛の略。お十夜ともいふ。淨土宗で行ふ仏事であつて、舊暦十月六日から十五日まで十夜の間、別時念仏を修する事をいふ。無量壽經に「於二此修善十夜一、勝二於他方諸佛國土一爲レ善千歳」とあるに基く。句の意は、菜畠の主が今夜はその畠を通行させて、參詣者の便を圖つてくれるといふので、佛事の日の和かな寛大な氣持。

雪ちるや――信濃の空に雲が低く垂れて冷たい雪が舞ひ始めると、人々は、これからの長い冬籠のことを考へて暗い心に閉されてしまふの意。

張番に――張番は夜警する人。句は夜警の番所に菴を借りられた人の上を詠んだのである。

彼是といふも――彼是と批評して、よく出來た、いや拙いなどといつてもほんの雪の解けない當座のことで、解ければ彼是の批評もないといふ意。

お袋がお福手ちぎる指南哉

餅搗が隣へ來たといふ子哉

餅花

かまけるな柳の枝にもちがなる

子のまねを親もする也節き候

東に下らんとして中途迄出たるに

椋鳥と人に呼ばるゝ寒かな　一茶

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋

兩國橋

お袋――錦餅のこと。如類稱呼「かゞみ餅」諸國の通稱なり。まどかなる形によりの名なりとかや。東國にてそなへと呼び又ふくでんとも云ふ。越後及び信濃にてふくでと云ふ。

餅搗が――お隣には餅搗が來たよ、うちではまだ搗かないのと誤まりげにいふ子のことを詠じた句。

かまけるな――かまけるは物事に掏泥してくよ〳〵すること。不幸不運などについてくよくよいふな、柳の枝に餅のなるといふ幸運は來るものだ。

節季候――昔、十二月二十二日より二十七八日頃にかけて、黄朱の菊を挿した笠を被き赤布で顔を覆つて、わづかに兩眼を出し二人乃至四人連立つて人の家に入り來り、唄を謠ひ舞つて米錢を乞うた物貰の一種。句の意は、節季候の眞似を子供がすれば、その子供の眞似を父親がするといふのである。

椋鳥――江戸で田舍者を嘲つていふ言葉。特に信州人を信州の椋鳥と云つた。

護持院原――今の東京市神田區錦町の邊。當時は護持院の跡の空地に夜鷹などの出没した事がある。蕉翁に「こがらいんなふたつにわれば二十四いん、ひろはおたかばよるはそたかば」

寒垢離にせなかの龍の披露哉

かも川をわたらじとちかひし人さへあるに、ひと度籠りし深山を下りて、しら髮つむりを吹れつゝ、名利の地に交る。

はづかしやまかり出てとる江戸のとし

其迹は子どもの聲や鬼やらひ　一茶

小人閑居成不善

冬籠り惡く物喰を習けり

廿一日節分

一聲に此世の鬼は逃るよな

けふからは正月分ぞ麥の色

寒垢離――寒垢離は心願のある人が寒中に水を浴びて神佛に祈願すること。こゝでは、隅田川の水浴びて相模國阿夫利山の不動尊に病氣平癒を祈ることをいふ。句は寒垢離をとる人が裸になると、その背中の龍のいれずみが忽ちあたりの人々の注目の的となつたさまを詠んだものである。

かも川をわたらじと云々――石川丈山が後水尾天皇に召された時「渡らじな歸の小川のあさくとも老の浪そふ影も恥かし」といふ歌を奉つて、お召に應じなかつたといふ故事。（續今世騎人傳等）。

はづかしや――丈山の歌の句を取つてはづかしやといひ、二度江戸に出て來た感慨を述べた句。

其迹は――年男の鬼やらひの聲に續いて元氣な子供の聲の響き渡る節分の夜の賑かな光景。

小人閑居云々――大學「小人閑居爲不善、無所不至」

惡く物喰――アクモノクヒ。惡食、わるもの食ひ。

節オ――立春の前夜。この夜鬼やらひ、豆撒を行ふ。

此の世の鬼――債鬼の類、年の内に節分が來たので、年内に來る筈の債鬼も「鬼は内鬼は外」といふ一聲に逃げ出すだらうの意。

札納

梅の木や御祓箱を負ながら

廿七日晴

坊守り朝とく起て飯を焚ける折から、東隣の園右衞門といふ者の餅搗なれば、例之通り來たるべし。冷てはあしかりなん、ほか〳〵湯けぶりの立うち賞翫せよといふからに、今や〳〵と待にまちて、飯は氷りのごとく冷へ（え）て、餅はつひに來ずなりぬ。

我門へ來さうにしたり配餅　一茶

他力信心〳〵と、一向に他力にちからを入て頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛れて、自力地獄の炎の中へぼたんとおち入候。其次に、かゝるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂へに、誂へなしにしておいて、はや五體は佛染み成りたるやうに惡るすましなるも、自力の張本人たるべく候。問ていはく、いか様に心得たらんには御流義に叶ひ侍りなん。答ていはく、別に小むづかしき子細は不存候。ただ自力他力、何のかのいふ芥もくたをさらりとちくらが沖へ流して、きて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと御頼み申ばかり也。如斯決定しての上には、な

けふからは――まだ舊年の中ながら、已に立春となつたので、正月の來たやうな心持になる。同じ麥の色も正月らしい色に見える。

札納――歳の暮に、その一年中に受けた諸社の札を集めて氏神などに納めること。

梅の木や――お祓はお札。お宮の境内の梅の木に、納めの札を入れた箱の括りつけられてある歳晩の風景である。

坊守り――もと眞宗の僧侶の妻の稱。こゝでは一茶の妻菊女。一茶坊と自稱してゐたからいふのであらう。

他力信心――自己の作業修禪によらず、ひたすら彌陀の本願の力の回向によつて淨境の眞果を得るといふ淨土門の信仰。

自力地獄――五欲煩惱の多い人間にあつて、自己の修業によつて證悟を得ようとする自力の信仰による事は、身心を苦しめる許りで到底解脫し得ないことを地獄に譬へて云つたのである。

凡夫――煩惱のきづなに縛られて、無明の闇に閉され、生死を出離することの出來ない衆生。

芥もくた――芥、塵屑の義。つまらぬ物事を譬へていふ。

ちくらが沖――和訓栞「對馬の海中にちくらが沖といふ所あり、潮の戸甚だ早し、韓國と日本のしほ堺也といへり」

むあみだ佛といふ口の下より、欲（慾）の網をはるの野に、手長蜘の行ひして人の目を霞め、世渡る鴈のかりそめにも、我田へ水を引く盜み心をゆめ〳〵持べからず。しかる時はあながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り給ふべし。是則當流の安心とは申也。穴かしこ。

五十七齡

ともかくもあなた任せのとしの暮　一茶

（〈頭書〉）觀覺上人　隔ヌル地獄極樂ヨクキケバ只一念ノシハザ也ケリ」

文政二年十二月廿九日

欲の網をはる――貪に張を設ける。手長蜘――盜み賊のあるを手長といふ。我田へ水を引く――己れの利益ばかり圖ることの譬。

ねがはずとも云々――古歌「心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん」を思ひあはせた文のさま。安心――佛語。信仰によつて心の方向を決定しこれに安住して動かないこと。ともかくも――一切を彌陀の御手に委ねて、やすらかな心に紅の蓮を迎るとの意。そこには、純他力に徹した信念の表白とは言へぬまでも、平凡人らしい一種の悟りがある。「目出度さも」の句と首尾相應じて當時の一茶の心境を物語つてゐる。

此一卷やしなのゝ俳諧寺一茶なるものゝ草稿にして、風調洒〻落〻と杜をなす。こや寸毫も洒落にあらず。しかもよく佛籬祖室をうかゞひ、さる法師がつれ〴〵もあやからず。一休白隱は猶しかなり。手ぶりはおのれが手ぶりにして、あが翁の細みをたどり、敢て世塵を厭ず、人情またやるかたなし。惡我此外に何をかいはむ。

嘉永四辛の亥春彼岸仲日

甄界四山人しるす

かの岸も
　さくら咲日と
　　なりにけり

おらが春

風調洒々落々と杜をなす――一茶の俳諧の風格調子は洒々落々たる一理の趣を有して、而も今の俳界に於て嶄然たる杜の如く目立つてゐる。こや寸毫も――一茶の俳諧は洒々落々たる趣を有するものではあるが、洒々落々といつても、輕浮な滑稽洒落（しやれ）の類ではは寸毫もない。佛籬祖室をうかゞひ――禪は釋迦佛、祖は禪宗の開祖達磨。佛門に入らうとするをいふ。惠能語錄に「吾三十而學佛籬祖室」とあり、芭蕉が幻住庵記にも「一たびは佛籬祖室の扉に入らんをせしも」とある。さる法師――徒然草の著者盤好法師。一休――こは宗純。狂雲子、夢閑等の號がある。紫野大德寺四十七世の住持。狂歌、戒書等に長じ、逸事奇行が頗る多い。文明十三年歿、八十八歳。白隱――俗姓長澤氏。諱は彗鶴。駿河國原驛の人。松蔭寺に住した。信州飯山の正受庵慧端公について禪の底奥を極め、高德の聲が高かつた。明和五年歿、八十四歳。猶しかなり――兼好にもあやかり得ず、一休白隱には一層さうだの意で、固より及び難い意。手ぶり――風調。風格。あが翁――芭蕉翁。細みの――あはれに細々と閑寂なる風情。寂、栞と共に芭蕉が俳句の生命とした

惟然坊は元祿の一畸人にして、一茶坊は今世の一奇人也。そが發句のをかしみは人々の口碑に殘りて世のかたり草になるといへども、ただに俳諧の皮肉にして、此坊が本旨にはあらざるべし。中野のさと一之が家に秘めおける一卷物や、ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを盡して、人情世態無常觀想殘す處なし。もし百六十年のむかしに在て、祖翁の過眼を得むには、惟然の兄とやのたまはんか、弟とや申し玉（給）はむか。

惶庵西馬

もの。

四山——出雲母里の藩主松平志摩守眞興東幻住庵、瓢海と號した。鳳朗門、安政元年正月歿、六十餘歳。

彼の岸も——彼の岸は極樂世界。そこにある故人一茶は憐咲く春となつたのでこの世に於けるが如く、俳諧に興をやつてゐるであらうといふ。故人追悼の句。

惟然——廣瀨氏。俗名は源之丞。柔牛、鳳謹堂、鳥落人、梅花佛等と號した。芭蕉の門人、美濃關の富家に生れたが事に感じて世を捨て、一生を風狂の中に終つた。洒落な性格と、特色ある句風によつて知られてゐる。寶永八年二月歿。六十餘歳。著書に「藤の實」「二葉集」等がある。

たゞに俳諧の皮肉にして——をかしみは彼の俳諧の皮や肉に相當するもので、その骨髓に相當するものではない。卽ち本旨ではないであらう。

中野——信州下高井郡中野町。

祖翁——蕉風の開祖芭蕉翁。

過眼を得むには——目に觸れることが出來たら。

西馬——富岡氏。名は俊明。通稱豊三郎。惶庵、櫂道等多くの別號がある。蕉門の門下。上州高崎の人。後江戸に出て多くの門弟を得た。安政五年八月加賀に行脚中病歿、五十一歳。「櫻莊七部集」「一茶四哲集」等の著がある。

昭和十年二月十日印刷
昭和十年二月十五日發行

おらが春
【定價三拾錢】

著者　藤村作

發行者　栗田確也
東京市神田區神保町一ノ三九番地

印刷者　田中末吉
東京市牛込區改代町二四番地

理想社印刷

發行所
東京市神田區神保町一ノ三九
振替東京一二三四番
電話神田（25）二二六四番
二二七九番
二二八九番
栗田書店

新選近代文學

註解叢書發刊に就いて

藤村作

古典文學は註釋に依らなければ、一般國民には讀解は出來ないから、古來その註解書、評釋書の類は多く、屋上屋を架するにも至つた。現代人は近世文學を通讀して、一通りの意を了解し得たやうな氣がするから、殆どその註釋書がない。併し滿足に讀まうとする人にはやはり註釋は必要である。本叢書はこのことに鑑みて、一般讀書の爲に適當と信ずる註釋を施した。その程度は、學究的煩瑣に陷らざるやう、さうして折角ありはありながら一向物足らないといふ不備を避けて、一讀その意を了解し得るに差支なきを期した。簡單にいへば大學、專門學校學生の自習程度にした積りである。

國文學は決して獨り國文學者の國文學であつてはならない。本叢書の任はそこにある。著者の目的はそこにある。

終

栗田書店版